

山口県埋蔵文化財調査報告 第91集

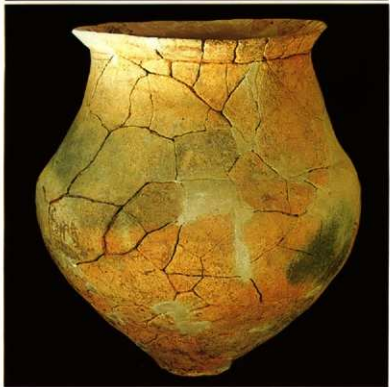
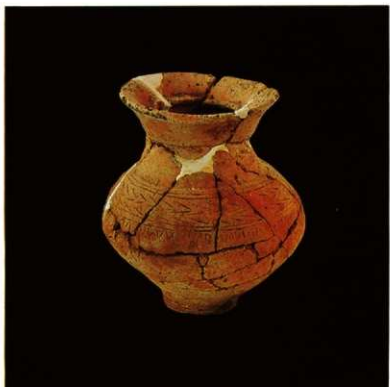
# 綾羅木郷台地遺跡 (上ノ山地区)

1986

財団法人 山口県教育財団  
山口県教育委員会



遺跡全景



綾羅木郷台地遺跡出土遺物 (上 P-7  
下 P-46)

## 序

各種の開発によって県下各地の埋蔵文化財が消滅していく頻度は、ここ数年とくに多くなってきております。

そしてそれに伴って、県土山口を築いてきた先人達の、その永い営みを今に伝える数多くの資料が、県下各地で発掘されております。

財団法人山口県教育財団は、教育・文化の振興という立場から、山口県教育委員会と協体制をとり、本年度から、山口県農林部の委託を受けて、圃場整備事業に係る埋蔵文化財の発掘調査を実施することといたしました。

ここに報告いたしました下関市所在の綾羅木郷台地遺跡（上ノ山地区）の調査では、弥生時代および中世の集落跡が発見され、その成果は当時の人々の生活や文化を知る上での貴重な資料となっております。

本書が学術・教育の資料として利用されることはもとより、ふるさとづくりの基礎資料として広く活用されることを期待するものであります。

調査にあたりまして御指導・御協力をいただいた関係各位に対し、深甚なる謝意を表わします。

昭和61年2月

財団法人山口県教育財団  
理事長 井上謙治

## 序

本県では、恵まれた自然環境のなかで豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策を推進しています。

こうした開発工事からかけがえのない埋蔵文化財を保護し、合わせて開発と文化財保存との調和のとれた県土づくりを旨として、山口県教育委員会では、関係機関と協議を重ねるとともに遺跡の保存や発掘調査を実施しているところです。

昭和60年度は、下関市大字綾羅木にある綾羅木郷台地遺跡の発掘調査を実施し、弥生時代や中世の集落跡を発見するとともに、当時の人々の生活や文化を知るうえで数多くの貴重な資料を得ることができました。

本書は、その調査成果をまとめた記録であり、広く文化財に対する認識や理解のため、また、学術研究の資料として活用されんことを願うものです。

おわりに、発掘調査の実施にあたり御協力いただいた関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

昭和61年2月

山口県教育委員会

教育長 高山 治

## 例 言

1. 本書は、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会が昭和60年度に実施した県営圃場整備事業に伴う発掘調査のうち、下関市大字綾羅木に所在する綾羅木郷台地遺跡（上ノ山地区）の発掘調査の成果をまとめたものである。

2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体	財団法人山口県教育財団（理事長 井上謙治）
	山口県教育委員会（教育長 高山 治）
事務局	財団法人山口県教育財団（事務局長 田中義人）
	山口県教育委員会文化課（課長 吉武康昌）
調査担当	（総括）山口県埋蔵文化財センター（所長 吉武康昌）
	（次長 中村徹也）
	（主任 藤本嘉和）
（調査員）	財団法人山口県教育財団事務局指導主事 岩崎仁志
	同 大村秀典
	同 中城龍彦
	山口県教育委員会文化課文化財専門員 渡辺一雄
	調査補助員 木村明史
（援助）	山口県埋蔵文化財センター職員

3. 本書に収録した本文・実測図・写真は、調査員の分担によって作成した。

4. 石器・石製品の石質鑑定については、山口県立山口博物館専門学芸員橋本恭一氏に、陶磁器の鑑定については山口県立美術館学芸課主任榎本徹氏の御指導を受けた。記して謝意を表す。

5. 出土遺物の整理にあたっては、山口県埋蔵文化財センター長沼昭乃・増田真由美・岩崎悦子・大村真澄・田良倍美・岡田洋子・永久早苗・葛山清美の協力を得た。

6. 本書に掲載した地形図（第5図）は、国土地理院発行25,000分の1の地形図「安岡」を使用したものである。

7. 本書で使用した方位は国土座標で、レベルは海拔標高で標示した。

8. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

P：土城 D：溝 B：掘立柱建物

9. 発掘調査の実施にあたっては、山口県農林部耕地課・山口県下関土地改良事務所・下関市教育委員会の協力を受けた。また、地元の方々には発掘調査作業員として多数参加していたが、大変お世話になった。以上、関係諸機関・各位に対し深く謝意を表したい。

10. 本書の文責は各文末に明記し、編集は岩崎と大村が担当した。

# 本文目次

I 調査に至る経緯	1
II 調査の経過	2
III 位置と環境	4
IV 主な遺構	8
1. 弥生時代	8
(1) 貯蔵用竪穴	8
(2) 土壇	17
(3) 溝	18
(4) その他	18
2. 中世	19
(1) 掘立柱建物	19
(2) 土壇	21
(3) 墓	23
(4) 溝	23
(5) 地下式横穴	24
3. その他の時代	26
(1) 掘立柱建物	26
(2) 土壇	26
V 主な遺物	27
1. 旧石器時代	27
2. 弥生時代	28
(1) 土器	28
(2) 石器	34
3. 中世	37
VI まとめ	40
1. 弥生時代	40
2. 中世	42

# 挿 図 目 次

第1図	上ノ山地区の予察調査	1
第2図	調査区設定図	3
第3図	遺跡のある綾羅木・安岡の平野	5
第4図	綾羅木・安岡平野部の地形略図	5
第5図	遺跡の位置と周辺の遺跡	7
第6図	響灘沿岸の地形と遺跡の位置	7
第7図	遺構配置図	9・10
第8図	貯蔵用竪穴の分布および底面標高模式図	11
第9図	貯蔵用竪穴断面形模式図	12
第10図	貯蔵用竪穴の規模と柱穴	13
第11図	貯蔵用竪穴実測図	16
第12図	P - 43実測図	17
第13図	P - 46実測図	18
第14図	D - 1土層図	18
第15図	掘立柱建物 (B - 9) 実測図	20
第16図	土坑 (P - 65) 実測図	22
第17図	墓 (P - 74) 実測図	23
第18図	地下式横穴 (P - 75) 実測図	25
第19図	掘立柱建物 (B - 1) 実測図	26
第20図	旧石器時代の遺物実測図	27
第21図	弥生土器実測図1)	31
第22図	弥生土器実測図2)	32
第23図	弥生土器実測図3)	33
第24図	石器実測図	35
第25図	石器・石製品実測図	36
第26図	中世の遺物実測図1)	38
第27図	中世の遺物実測図2)	39
第28図	砥石実測図	39
第29図	甕形土器	41



# 表 目 次

第 1 表	遺構断面図土層記号表	14
第 2 表	貯蔵用竪穴一覧表	15

# 図 版 目 次

図版 1	遺跡全景(1)	
図版 2	遺跡全景(2)	
図版 3	遺跡部分(1) I 地区、II 地区	
図版 4	遺跡部分(2) III、IV、V 地区	
図版 5	貯蔵用竪穴(1) P - 3、P - 9	
図版 6	貯蔵用竪穴(2) P - 5	
図版 7	貯蔵用竪穴(3) P - 6、P - 7	
図版 8	貯蔵用竪穴(4) P - 12、P - 21	
図版 9	貯蔵用竪穴(5) P - 35、弥生時代のその他の遺構(1) P - 43	
図版 10	弥生時代のその他の遺構(2) P - 46、D - 1	
図版 11	中世の遺構(1) P - 47、P - 65	
図版 12	中世の遺構(2) P - 73、P - 74	
図版 13	中世の遺構(3) P - 75	
図版 14	中世の遺構(4) P - 75	
図版 15	中世の遺構(5) B - 2・3・5、B - 8・9・10、P - 65	
図版 16	出土遺物(1)	
図版 17	出土遺物(2)	
図版 18	出土遺物(3)	
図版 19	出土遺物(4)	
図版 20	出土遺物(5)	
図版 21	出土遺物(6)	

## I 調査に至る経緯

綾羅木郷台地遺跡上ノ山地区は、下関市大字綾羅木字大歳・恵のふ田に所存する弥生時代および中世を中心とした集落遺跡である。本遺跡の西約 500m の同一丘陵には、弥生時代前期末の集落跡として全国的にも知られている国指定史跡綾羅木郷遺跡がある。

遺跡名とした「綾羅木郷台地遺跡」は、従来の遺跡地名には無く、今回新たに使用した名称である。綾羅木郷台地上に点在する弥生時代を中心とする遺構群は、これまで、綾羅木郷遺跡として包括されていた。しかし、この遺跡名は、史跡指定地を中心とする一帯に限定して用いる場合が多いので、遺跡名としては混乱が生じる場合がある。そこで、この混乱をさけるため、綾羅木郷遺跡を含めた台地上の遺構群を総称して綾羅木郷台地遺跡群と呼ぶことにしたのである。

今回の上ノ山地区での調査は、県営圃場整備事業に伴う緊急調査である。綾羅木郷台地の北側梶栗川流域の圃場整備事業が具体化し、山口県農林部耕地課の照会を受けて、山口県教育委員会が事業地区内の遺跡の分布調査を実施したのは、昭和59年度のことである。調査は同年12月11～14日に実施した。その結果、郷集落の北側台地上（郷北地区）と上ノ山古墳（前方後円墳）北側の台地緩傾斜面（上ノ山地区）の2ヶ所で弥生時代の遺構が発見された。このうち昭和60年度に事業施工が予定されている上ノ山地区については、遺跡の保存を図るため、農林部耕地課と協議に入った。しかし、協議の中で、この地区は事業施工区の中でも最も高位にあり、工事の工程上掘削が不可欠であることが判明したため、遺跡の現状保存は困難と考えられるにいたった。そこで、やむなく発掘調査を実施し記録保存を行うことにした。

調査は、農林部の委託を受けた財団法人山口県教育財団と、文化庁の国庫補助を受けた山口県教育委員会が共同で実施することになり、昭和60年7月から開始する予定であった。しかし、事業地区では協議段階とは異なって作付けが実施されたので、調査開始は9月に延期された。

（渡辺）

第1図 上ノ山地区の予  
察調査（昭和59  
年度）



## Ⅱ 調査の経過

昭和59年度に行われた予察調査の結果にもとづいて、昭和60年9月2日から同年12月13日まで本調査を行った。本調査では畑地・水田の収穫時期との関連で対象地区全域を一時に発掘することができなかった。したがって収穫終了順に部分発掘を繰返すことになった。

本調査では、予察調査によって遺構の確認された地域を対象として調査区を設定し、便宜上その中をⅠ～Ⅴの地区に分けた（第2図参照）。調査は、その時点で作付されていないⅡ地区から開始し、Ⅳ地区西側・Ⅴ地区、次いでⅠ地区・Ⅲ地区・Ⅳ地区東側を発掘した。

最初に調査を行ったⅡ地区はトレンチ調査により柱穴等の遺構が確認され、その集中部分を中心に拡張した。検出した遺構は柱穴（掘立柱建物1棟を含む）・土坑・溝であり、いずれも中世に属するものであった。この地区の遺物包含層および遺構埋土からは多量の鉄滓（炉壁の一部と思われるものを含む）を出土しており、何らかの生産遺構が付近に存在した可能性が高い。

Ⅱ地区に引き続き、ビニールハウス撤去の完了を待ってⅣ地区西側・Ⅴ地区の調査を開始した。トレンチ調査によって多くの土坑の存在が明らかになったⅣ地区西側は人力によって拡張した。Ⅴ地区はトレンチによって、遺構の分布が希薄なことが判明し、存在が確認された部分については拡張した。Ⅳ地区西側・Ⅴ地区からは34基の土坑群を検出し、その掘り込み・実測等に多くの時間と労力を費やさざるを得なかった。この一帯の表土・攪乱土中からは古墳時代後期の遺物が若干出土しており、調査区の南東100mには当該時期の上ノ山古墳が存在することから、この時期の遺構も付近に存在したことがうかがわれた。

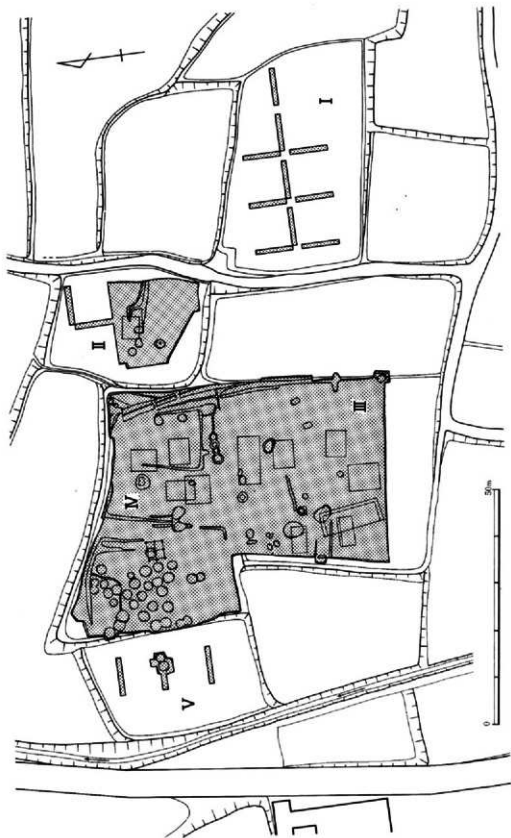
Ⅰ地区については、畑地の収穫終了とともにⅣ地区西側・Ⅴ地区と併行して調査を行った。トレンチを設けたところ、若干の柱穴が極めて希薄に分布する状況であったため、トレンチ調査にとどめた。

調査区を中心とするⅢ地区・Ⅳ地区東側は、稲の収穫の終了後に調査を開始した。表土の除去には重機を用い、遺構面直上まで削ったのち、人力で遺構を検出した。この範囲からは多数の柱穴（掘立柱建物11棟を含む）・土坑・溝を検出し、墓・地下式横穴も1基ずつ確認した。これらの混在する遺構は、弥生時代と中世の2時期に分かれ、調査の進行とともにいくつかの興味深い事実が明らかになった。すなわち、弥生時代前期の土坑（貯蔵用竪穴）とともに同時期の生活址が確認されたこと、また中世においてやや大型の建物が存在し、墓や地下式横穴を集落内に含むことなどである。

調査終了直前の段階で空中写真を撮影し、その後遺構配置図（20分の1）を作成して現地における調査を終えた。

なお、以上の調査成果を踏まえて空中写真撮影後の12月7日に現地説明会を実施し、地元を中心に多くの人々の参加を得た。報道機関の助けも得て、これによって埋蔵文化財に対する関心と理解を深める一助とすることができた。

（岩崎）



第2图 调查区设定图

### Ⅲ 位置と環境

綾羅木郷台地遺跡群上ノ山地区は、下関市大字綾羅木大字大蔵・恵のふ田に所在する弥生時代前期末および中世の集落遺跡である。梶栗川と綾羅木川に挟まれた洪積台地上に広がる綾羅木郷台地遺跡群の中では最も東に位置し、西約 500m には遺跡群の中心を占める綾羅木郷遺跡（国指定史跡）が、また南に接して前方後円墳である上ノ山古墳がある。

下関市大字綾羅木・安岡地区は山口県の西南端にあり、響灘沿岸地方では最も広い平野部を有している。この広い平野部は、竜王山東麓から発源して安岡に注ぐ友田川の形成した扇状地（現在標高30～50mの丘陵として断片的に残る、見かけ上の高位段丘）と、この上をリスヴェルム間氷期海進時の砂礫が覆った洪積台地（中位段丘、上位面は20～30m、下位面は10m前後）、そして竜王山東麓から内日を抜け流入する綾羅木川および梶栗川の沖積地よりなる。また、海岸線に沿って三条の砂堆列がみられる。

この砂堆列は縄文時代以降の地形変化により形成されたものである。縄文時代前期は世界的な規模の気候の温暖化（ヒブシサマル）が頂点に達した時期で、縄文海進と呼ばれる海岸線の内陸への移動により、まず三条の砂堆列のうち内陸側二条が形成されている。その後、後退した海岸線は後期に再び海進に転じ、現在の標高5m前後の等高線くらいまで湾入していたと考えられており、この時期には調査地区のすぐ北側の梶栗川流域は深い入江であったとみられる。その後、海岸線は徐々に後退し、本遺跡が営まれた弥生時代前期には付近には多くのラグーンや低湿地が残されて、初期水稲耕作には絶好の条件であったと思われる。また、古墳時代後期には再び小海進期が訪れ、現在の海岸線に沿う三条目の砂堆が形成されている。

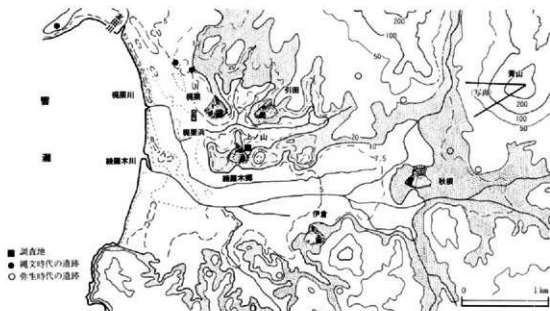
遺跡のある台地は比高差10m前後の低平な洪積台地である。南は綾羅木川の沖積低地である川中平野を望み、北は梶栗川の形成した小河谷に接している。また、西はやや急峻に下降し海岸部へと続き、東はなだらかな起伏をくりかえしながら竜王山南山麓へと移っている。上ノ山地区はこの台地（広義の綾羅木郷台地）のほぼ中央北寄りであり、梶栗川低地に向けての緩傾斜面に遺跡が営まれている。標高は中央部で約8mを測る。

この台地を構成する基本的な層序は、基部の洪積層の上を純良な珪砂からなる風成層が覆い、そして砂層上部は酸化した赤土層となり、砂層と赤土層の間には一部白色粘土が挟まれている。遺跡地では、後世の耕作等の削平により赤土層は認められず、砂層と部分的に白色粘土が地山となっている。

綾羅木および安岡の平野部の気候は、裏日本式の気候区に入るが、瀬戸内海との海峡部に近いという地理的な条件により、むしろ北九州の気候に近いと言える。海岸部であるため、暖流の影響で比較的暖かく降水量も多い。年平均の降水量は約1,700mmである。また、風は強く、台地上にはいたる所に防風・防砂林がみられる。



第3図 遺跡のある綾羅木・安岡の平野（青山から遠望）



第4図 綾羅木・安岡平野部の地形略図

(下関市教委 1981を作図)

綾羅木・安岡の平野部で人々の生活が始まったのは、おそらく洪積世も終りに近い頃であった。綾羅木郷遺跡では礫器と剥片石器が発見されている。その時期については不明な点が多く、一部を旧石器時代中期に比定する考え方もあるが、確証がなく、後期旧石器時代とする説が強い。今回の上ノ山地区での調査ではナイフ形石器・細石刃とみられる剥片が検出されており、後期旧石器時代には確実に人々の生活が展開されていたのである。旧石器時代の遺物は、他に横野遺跡（スクレーパー、剥片石器）と秋根遺跡（エンドスクレーパー、台形石器）でも発見されており、すでに平野部の全面にわたり人々の活動が繰り返されていたと思われる。

縄文時代になるとその早期から晩期にいたるまでの遺物が各地で採集されている。そのあるものは、低い台地や段丘上に散布しているが、大半は旧海岸砂丘上で発見されている。おそらく漁労を中心とする生活が営まれていたのだろう。なお、理由はわからないが、綾羅木郷台地上からは今のところ縄文時代の遺構・遺物は発見されていない。縄文時代の遺跡の内主要なものを紹介する。

安岡の北部、海に突出した岬にある紫野遺跡では、早期の押型土器や黒曜石製石鏃が発見されている。弥生時代の埋葬遺跡として知られている梶栗浜遺跡の下層からは、縄文時代前期の九州曾畑式に類似した土器が発見されている。低位の洪積台地から砂堆上に立地する神田遺跡は、縄文時代早期から後期にかけて断続的に営まれた集落遺跡で、土城群・柱穴群・貝塚・埋葬遺構が多量の遺物と共に発見されている。潮待貝塚は神田遺跡と同一丘陵上にある中期末から後期にかけて形成された貝塚である。縄文時代晩期の知見は極めて少い。わずかに秋根遺跡において晩期の土器が数点発見されているにすぎない。

この地方の最古の弥生土器は綾羅木郷遺跡から発見されたもので、綾羅木Ⅰ式土器として編年されている。この土器は、最古の弥生土器である板付Ⅰ式土器より幾分時期の下るものとする考え方が強い。そしてこの地に縄文晩期の顕著な遺跡が見い出されていないことなど合わせ考えて、この地域における弥生文化の登場が、稲作文化荷担者による移住によるものであったとする説が有力である。縄文晩期から始まった小海退によって綾羅木川流域の低地が拡大し、いたる所にラグーンや湿地が残されたことも、弥生文化の登場を可能にした重要な条件である。綾羅木郷遺跡・梶栗遺跡・引田遺跡・伊倉遺跡など前期の集落はこのような低地を見下ろす洪積段丘上に営まれている。

中期になると上記の集落が分村化して移動し、小谷に臨む高燥地や山麓傾斜面に小集落を形成していった。伊倉遺跡では北東の高位面に集落が移動し、綾羅木川北岸の高位段丘面に位置する石原遺跡は、秋根遺跡と同様に、弥生時代終末から古墳時代初頭の集落遺跡である。前期の埋葬遺跡である梶栗浜遺跡は砂堆上に営まれている。これまでに多鈕細文鏡・細形銅剣を副葬した箱式石棺など10余基の埋葬遺構が発見されている。垢田の第三紀丘陵上に営まれた俣田地蔵堂遺跡は、船載の蓋弓帽・内行花文鏡を出土した中期の首長墓である。

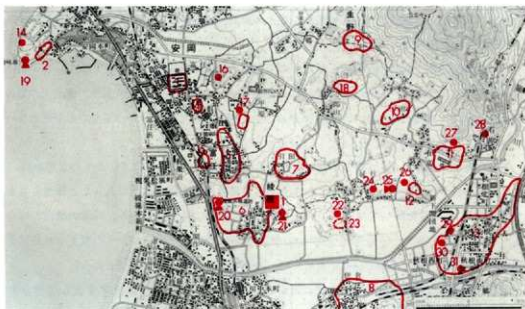
古墳時代になると、仁馬山古墳・上ノ山古墳・若宮古墳・観音岬古墳などの前方後円墳をは

じめ、多くの古墳が集中して築かれている。特に前方後円墳の密集度は県内でも最も高い地域である。一方集落遺跡は、23軒の竪穴住居が発見された秋根遺跡のほか、伊倉遺跡や石原遺跡など極限られた遺跡しか判明していない。

(渡辺)

(参考文献) 下関市史編修委員会 1965.3 「下関市史 原始一中世」 下関市

下関市教育委員会 1981.3 「綾羅木郷遺跡発掘調査報告第1集」

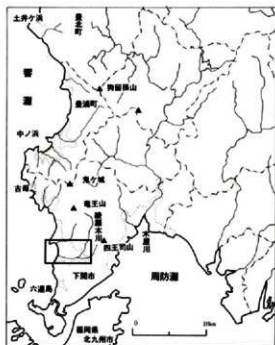


第5図 遺跡の位置と周辺の遺跡

(凡例)

- |           |             |
|-----------|-------------|
| 1. 調査地    | 17. 茶臼山古墳   |
| 2. 柴野遺跡   | 18. 三郎山古墳群  |
| 3. 神田遺跡   | 19. 観音岬古墳   |
| 4. 潮待貝塚   | 20. 若宮古墳    |
| 5. 梶栗遺跡   | 21. 上ノ山古墳   |
| 6. 綾羅木郷遺跡 | 22. 岡古墳     |
| 7. 引田遺跡   | 23. みやばし古墳群 |
| 8. 伊倉遺跡   | 24. 奥の屋敷石棺群 |
| 9. 横田遺跡   | 25. 仁馬山古墳   |
| 10. 上有富遺跡 | 26. 楠松古墳    |
| 11. 石原遺跡  | 27. 有富古墳    |
| 12. 下有富遺跡 | 28. 石原古墳    |
| 13. 秋根遺跡  | 29. 秋根1号古墳  |
| 14. 横野石棺  | 30. 秋根2号古墳  |
| 15. 梶栗浜遺跡 | 31. 塚本古墳    |
| 16. 官林山古墳 |             |

第6図 警灘沿岸の地形と遺跡の位置  
(下関市教委1981を作曲)





## IV 主な遺構

上ノ山地区において検出された遺構の種類とその数は、弥生時代前期末を中心とする時期の貯蔵用竪穴36基・土壇11基・溝2条（うち1条は大溝）・柱穴と、中世の掘立柱建物12棟・土壇20基（1基は土壇墓）・地下式横穴墓1基・溝20条・柱穴多数、それに時期不明の倉庫様掘立柱建物1棟・柱穴である。

右の折り込みは、遺構の配置を示したものである。遺構は調査地区のほぼ全域に広がっているが、Ⅱ地区南半およびⅢ地区東半で比較的希薄になっている。Ⅱ地区の南部、Ⅲ地区の東に接する地区は、試掘の際地山が急激に下がることが確認されており、かつ現在でも湿田となっているので、古くは沼地状を呈していた可能性が考えられる。

弥生時代の遺構群は、Ⅳ地区の東端にある大溝（V字溝）に囲郭されていたものと思われ、この大溝の西でしか発見されていない。すなわち集落は環濠集落の形状であったと推定できる。貯蔵用竪穴は2基を除いてすべてⅣ地区西端とⅤ地区に密集しており、集落の構造を知るうえで興味深い。また、不整形の大形土壇がⅢ地区に点在しているが、その埋土中からは石楯など小型石器と剥片多数が発見されている。石器製作との係わりが注目される。

中世の遺構群は調査地区のほぼ全域に広がっているが、Ⅱ地区ではスラグを含む遺構が多く認められ、鍛冶工房の存在が予想される。（渡辺）

### 1. 弥生時代

#### (1) 貯蔵用竪穴

本調査区で検出された弥生時代の土壇47基のうち、その形態および遺物の出土状況から、「貯蔵用竪穴<sup>※</sup>」と見做すことができるものは、全部で36基を数える。そして、それらに共通する特徴を略述すると、以下の点があげられる。①上面の径1.5m以上、深さ1m以上の規模のものが大部分を占める。②いわゆる「袋状」と言われる断面形を有するものが多い。③多量の土器類を、その埋土中に包含する。④覆屋的な上部施設を支えるために掘り込まれたと思われる柱穴を中央部にもつものが多い。

本調査区の南西方向約500mの位置に所在する国指定史跡綾羅木郷遺跡（以下「郷遺跡」と呼ぶ）では、実に、911基にのぼる貯蔵用竪穴が発見され、そのうちの590基について、詳細な発掘調査報告がなされている。本調査区の貯蔵用竪穴については、郷遺跡の調査成果を踏まえつつ、以下に略述する。

※「綾羅木郷遺跡Ⅰ」（1981 下関市教育委員会）に使用された名称を、便宜的に用いることとする。



第7图 遺構配置図

## 1. 分布

36基中、34基（P-1～34）が調査区の北西の隅に集中して展開し、しかも、その密度がきわめて高い。残る2基（P-35・36）はこの一群の竪穴群から離れ、東約30m、すなわち、集落の東端を南北に走っていたと思われる環壕のそばに位置する。

分布は、遺構検出状況と現在の地形から推定してさらに西側に広がるが予測できるが、そう広い範囲とも思えない。今回のトレンチ調査では、この部分については確認するに至らなかった。



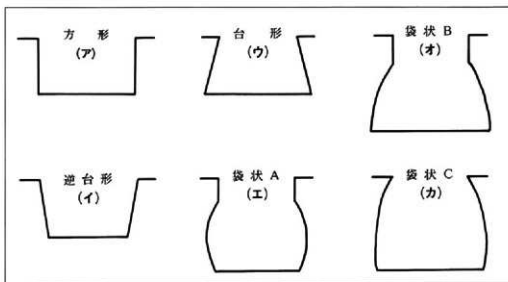
第8図 貯蔵用竪穴の分布および底面標高模式図

## 2. 平面形

調査した36基は、総じて平面形が円形をなす（第2表参照）。

## 3. 断面形

後世の間壁で上部はある程度削平されており、穴口付近の詳細は定かではない。しかし、断面形にはバラエティがみられ、その形態的特徴をパターンとして示すと第9図に示した6種に大別できる。



第9図 貯蔵用壜穴断面形模式図

ア) 方形 断面形が横長、または縦長の方形に近い形をなすもので、壁面が底面からほぼ垂直に地表面まで立ち上がるもの。

イ) 逆台形 壁面が底面からやや外傾して立ち上がり、そのまま地表面に至るもの。

ウ) 台形 壁面が底面から内傾して比較的直線的に立ち上がり、そのまま地表面に至るもの。

エ) 袋状A 断面形がフラスコ状をなすもので、壁面が底面から当初ゆるやかに外傾し、ふくらみをもちながら次第に内傾し、地表面近くで、垂直かそれに近く立ち上がるもの。

オ) 袋状B Aと同じくフラスコ状であるが、壁面が底面からふくらみをもちながら内傾し、地表面近くで垂直か、それに近く立ち上がるもの。

カ) 袋状C 壁面が底面からふくらみをもちながら、内傾し、そのまま地表面に至るもの。このほかにも、それぞれのパターンを合わせもつものも若干みられ、このパターンでとらえられないものは、いずれも壁面が崩落しているものとみられる。

#### 4. 規模

最も規模の大きいP-12(第11図参照)で、現状での深さ約155cm、底面積約4.0㎡を測るが、上部の削平の多少を考慮に入れても、現状での深さ120~140cm、底面積2.0~3.0㎡のものが多く(第2表参照)。これは、隣接する郷遺跡の貯蔵用壜穴の標準的な規模のものときわめて類似している。

また、底面積3.0㎡以上の壜穴13基のうち12基が断面形袋状を呈する点は、規模と断面形との関連において注目してよい。

#### 5. 時期区分

P-32を除いて、かなりの土器類が出土しているので(第11図P-5・6・7・12参照)、

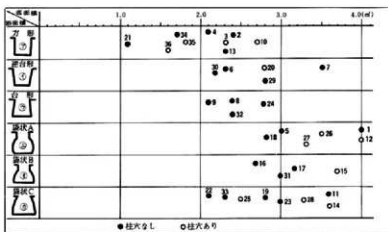
貯蔵用竪穴の時期区分を、土器の項で詳しく説明されているように、郷遺跡で試みられている編年案を基準として考えてみたい。

第8図に示したとおり、大別して五段階の時期を設定することが可能である。まず、綾羅木Ⅱ式およびⅢ式A期の要素が併存して含まれるもの12基については、その大部分が竪穴群の中でも西側に展開している。第二に、Ⅲ式A期の要素だけをもつもの9基のうち、5基は北側にほぼ集中し、残りの4基は中央部に東西に点在する。第三に、Ⅲ式AおよびⅢ式B期の要素を合わせもつもの4基は、中央部にほぼまとまって展開する。第四に、Ⅲ式B期のみのも6基は、中央部から南寄りに点在する。最後に、Ⅲ式BおよびⅣ式期の要素が併存するものは、ただ1基最も南側に展開している。

以上の点から、竪穴群は北西方向から南東方向に展開していることとなり、未発見の住居跡の位置を推測する上で興味深い。また、規模と時期との関連では、Ⅲ式A期のみの要素をもつ竪穴は小規模のものが多い。

## 6. 柱 穴

底面に柱穴をもつ貯蔵用竪穴は合計12基を数え、うち10基についてはほぼ底面の中央に位置している。また、右図に示したように、必ずしも大規模な竪穴だけ



第10図 貯蔵用竪穴の規模と柱穴

に覆屋のための柱穴があるとは見做し難い。

## 7. 代表的な竪穴 (第11図参照)

### 1) P-3

平面形は円形を呈し直径約178cm、断面形は方形に属し深さ約79cm。やや小規模である。底面の中央に直径約32cm、深さ約35cmの柱穴が1基穿れている。粘質砂が3層にわたり堆積し、遺物は、Ⅲ式A期の弥生土器と若干の焼土塊が出土した。

### 2) P-5

平面形は不整形円形を呈し、断面形は袋状Aに類似する。北西上部に攪乱の跡が見られた。砂質土・粘質砂・粘質土が9層にわたり堆積し、底面から約55cmの粘質砂の部分に、奥ゆき約50cm、幅約150cmの棚がほぼ水平に掘り込まれている。この棚部からも土器(Ⅱ式およびⅢ式A期)が出土。貯蔵用竪穴のより有効な利用方法として注目すべき特殊な構造をもつ遺構である。転石使用の石器(敲石・第24図・33)も出土している。

### 3) P-6

平面形は不整円形・断面形は逆台形状を呈する。南東側でP-7と重複。P-7に切られるが、時期的な差は出土遺物からみて少ないと思われる。Ⅱ式およびⅢ式A期の弥生土器と若干の焼土塊が出土した。

### 4) P-7

P-6と北東側で重複する。平面形は不整円形・断面形は逆台形状を呈し、規模的には本調査区の中でも大型に属する。口縁内部に貼り付け突帯をもつⅢ式A期の完形の壺(第21図・6)が、底面に横たわって出土した。

### 5) P-9

平面形は不整円形を呈し、断面形は台形に属する。底面に溝状の掘り込みをもち、Ⅲ式A期の弥生土器を出土した。本調査区の竪穴群は郷遺跡と同じく珪砂層に掘り込まれており、排水性に優れ乾燥度も高い。しかし、竪穴という性格上雨水の流入を完全に防ぐことは難しいので、特に意を用いる必要のある貯蔵物については、それを納める竪穴に排水溝を設けた可能性もあると思われる。

### 6) P-12

前述したように、本調査区中最大の規模の貯蔵用竪穴である。平面形は不整円形を呈し、断面形は袋状Aに属する。砂質土・粘質砂・粘質土が5層にわたり厚く堆積し、底面中央部に直径約36cm、深さ約20cmの柱穴をもつ。遺物は、Ⅱ式およびⅢ式A期の弥生土器が底面から多量に出土した。

### 7) P-21

平面形は円形を呈し直径約120cm、断面形は方形に属し深さ約62cmを測る。調査した中で、最も小規模の竪穴である。北側上部に擾乱の痕跡が認められたが、Ⅰ層に炭化物と暗褐色および明褐色の焼土が厚く堆積していた。遺物は、後掲するようにやや特殊な器形(第21図・9・10・11・12, 第23図・25)の弥生土器が出土した。他の貯蔵用竪穴と比べてはるかに小規模であることと合わせて、貯蔵用以外の機能をもつことも考えられる。

第1表 遺構断面図土層記号表

土質	色別							
A 砂質土	1	黒褐色	7	黄褐色	13	明赤褐色	19	にぶい黄褐色
B 粘質土	2	褐色	8	にぶい黄褐色	14	暗赤褐色	20	黄色
C 粘質砂	3	褐灰色	9	明黄褐色	15	灰黄褐色	21	灰赤色
D 焼土	4	明褐色	10	灰褐色	16	橙褐色		
E 炭化物	5	暗褐色	11	赤褐色	17	にぶい橙褐色		
	6	にぶい褐色	12	にぶい赤褐色	18	黄褐色		

第2表 貯蔵用竪穴一覧表

P 番号	平面形	断面形	上面径	底面径	深さ	底面積	出土遺物		備考
							土器	石器・石製品・その他	
1	円	エ	211	225	98	4.0	Ⅱ・ⅢA		P-2と切り合う
2	不整円	ア	174	174	78	2.4	Ⅱ	土鍬	P-1と切り合う
3	円	ア	178	170	79	2.3	ⅢA	焼土塊	底面に柱穴1
4	不整円	ア	164	165	112	2.1	Ⅱ・ⅢA		
5	不整円	エ	196	194	136	3.0	Ⅱ・ⅢA	砥礫使用の石器・石彫丁	中段に横
6	不整円	イ	212	170	123	2.3	Ⅱ・ⅢA	焼土塊	P-7に切られる
7	不整円	イ	270	212	153	3.5	Ⅱ・ⅢA		P-6を切る
8	不整円	ウ	151	174	118	2.4	ⅢA		
9	不整円	ウ	149	164	95	2.1	ⅢA		底面に溝
10	不整円	ア	180	181	126	2.7	ⅢA	石鏃	底面に柱穴1
11	不整円	(カ)	205	215	126	3.6	ⅢB	石鏃	P-17を切る
12	不整円	エ	210	225	155	4.0	Ⅱ・ⅢA	焼土塊・チップ	底面に柱穴1
13	不整円	(ア)	168	173	133	2.3	ⅢB	焼土塊・軽石・すり石	
14	不整円	カ	204	214	153	3.6	ⅢA・ⅢB	石斧・円礫	底面に柱穴1
15	不整円	(イ)	195	218	143	3.7	時期不明	石皿・円礫・軽石	底面に柱穴1
16	不整円	オ	172	186	130	2.7	ⅢA	石鏃	
17	円	オ	190	202	142	3.2	ⅢA		P-11に切られる
18	不整円	エ	175	188	138	2.8	Ⅱ・ⅢA	石剣	
19	不整円	カ	170	188	130	2.8	ⅢA		
20	不整円	イ	205	188	125	2.8	ⅢA・ⅢB	ナイフ形石器	底面に柱穴1
21	円	ア	120	120	62	1.1	Ⅱ・ⅢA	石斧・焼土塊	
22	不整円	カ	160	165	68	2.1	ⅢB	焼土塊	P-25を切る
23	不整円	カ	196	194	92	3.0	Ⅱ・ⅢA	砥石	
24	不整円	(ウ)	166	190	126	2.8	Ⅱ・ⅢA		
25	不整楕円	カ	長184 短156	長192 短162	80	2.5	Ⅱ・ⅢA	砥石	P-22に切られる 底面に柱穴1
26	円	エ	200	210	113	3.5	ⅢA・ⅢB		P-27に切られる 底面に柱穴1
27	不整円	エ	198	205	128	3.3	ⅢB	円礫	P-26を切る 底面に柱穴1
28	不整円	カ	180	204	75	3.3	ⅢA・ⅢB	柱状片刃石斧・石鏃	底面に柱穴
29	不整円	イ	222	190	134	2.8	時期不明		
30	不整円	イ	175	166	109	2.2	ⅢA		
31	円	オ	182	194	112	3.0	ⅢA		
32	不整円	ウ	149	174	79	2.4			
33	不整円	カ	185	170	90	2.3	ⅢB・Ⅳ	石鏃・すり石と台石	P-34を切る
34	円	(ア)	154	149	56	1.7	ⅢB		P-33に切られる
35	不整円	ア	長173 短148	長164 短142	58	1.8	ⅢB	大型給刃石斧	底面に柱穴1
36	不整円	ア	154	144	43	1.6	時期不明		底面に柱穴1

※( )は推定

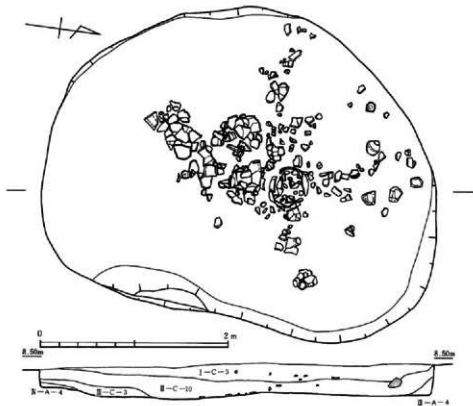




## (2) 土 塚

貯蔵用竪穴以外に土塚が11基検出され、それらの総てが貯蔵用竪穴群より南東側の比高50～60cmの高位面に点在する。平面形は、不整楕円形が7基（P-37・39・40・41・42・43・44）、隅丸長方形が3基（P-45・46・47）、不整円形が1基（P-38）、深さは浅いもので約12cm、深いもので約35cmである。大部分の土塚から、貯蔵用竪穴群と時期的に対応する廃棄された状態の土器と若干の石器が出土した。以下、代表的な2例について略述する。

### 1) P-43



第12図 P-43実測図

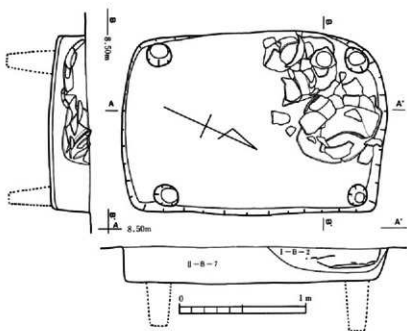
平面形は不整楕円形を呈し、長径約415cm、短径約330cm。本調査区で検出された土塚中、最大の平面規模をもつ。断面形は逆台形に近く深さ約35cm。遺物は、弥生土器のほか石鏃4（第24図・34・35・36）、砥石2、石庖丁1（第25図・40）と石鏃未製品ならびに石鏃の製造過程で剥離した剥片多数が出土した。土器は綾羅木Ⅲ式B期のものが大部分を占めている。石鏃未製品と共に剥片を多数出土したことは、この土塚の機能を知る上で興味深い。なお、南東に隣接するP-44と東側にやや離れて存在するP-42も、出土遺物と形態が類似していることから時期的に併存する同機能の遺構と考えられる。

### 2) P-46

平面形は隅丸長方形で、長径207cm・短径144cm、断面形はやや逆台形で深さ28cm。埋土の

堆積は上下2層にわかれ、一個体分の大型無文壺(巻頭カラー・第21図・13)を中心とする弥生土器(Ⅱ式-Ⅲ式A期)は、上層から出土した。四隅に小穴をもつ。

土坑の機能は明らかではないが、本土坑と長軸方向と形態をほぼ同一にする土坑2基(P-45・47)が近接して存在する。



第13図 P-46実測図

### (3) 溝

弥生時代の溝2条が検出された。

まず、調査区の東端を中央部からやや北東に走るD-1は、典型的な断面V字形をなす。北側ほど広くなり、最大幅は上面で約220cm、底面で約25cm。遺物には、Ⅲ式AからⅢ式B期の弥生土器と石庵丁(第25図・41)がある。

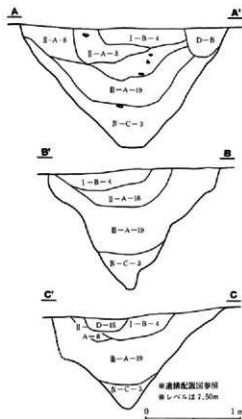
时期的に土坑群と対応しており、集落の環濠である可能性をもつ。

D-2は、P-43の東側をほぼ東西に走り、長さ約8m、幅約65cm、深さ約17cm。Ⅲ式A期の弥生土器を出土した。

### (4) その他

弥生時代のその他の遺構としては、若干の柱穴を検出した。しかし、上部を削平されており、住居などに伴うものかどうかについては確認できていない。

(大村)



第14図 D-1土層図

## 2. 中 世

調査区のほぼ全域にわたって中世の遺構を検出した。主なものは、掘立柱建物とそれに伴うと思われる柱穴・土壇・墓・溝・地下式横穴などである。以下に主な遺構について紹介する。

### (1) 掘立柱建物 (図版 15)

多数の柱穴を検出したが、それらによって復元できた建物は12棟である。主軸は、ほぼ東西・南北の2通りであり、著しく異なる例はない。なお、B-1については柱穴出土の遺物が細片であるため時代が限定できず、「その他の時代」の項で扱った。

**B-2** 桁行が3間(6.0m—20尺) 梁行が2間(5.4m—18尺)の東西棟(主軸はN85°W)の建物である。柱間寸法は、桁行が7尺+6尺+7尺、梁行が9尺+9尺である。

**B-4** 桁行は5.4m(18尺) 梁行が2間(4.5m—15尺)の南北棟(主軸はN9°E)の建物である。桁行はおそらく3間と思われ、東側に側柱1つ(南から7尺)を残す。梁行柱間寸法は北側で7.5尺+7.5尺、南側で8尺+7尺である。

**B-5** 桁行は3間(5.4m—18尺) 梁行は2間(4.2m—14尺)の東西棟(主軸はN85°W)の建物である。柱間寸法は、桁行で北側が6尺等間、南側が7尺+5尺+6尺、梁行では6尺+8尺である。この建物は溝(D-10・13)に囲まれており、方向性もほぼ一致することから、この溝と同時に存在した可能性が高い。

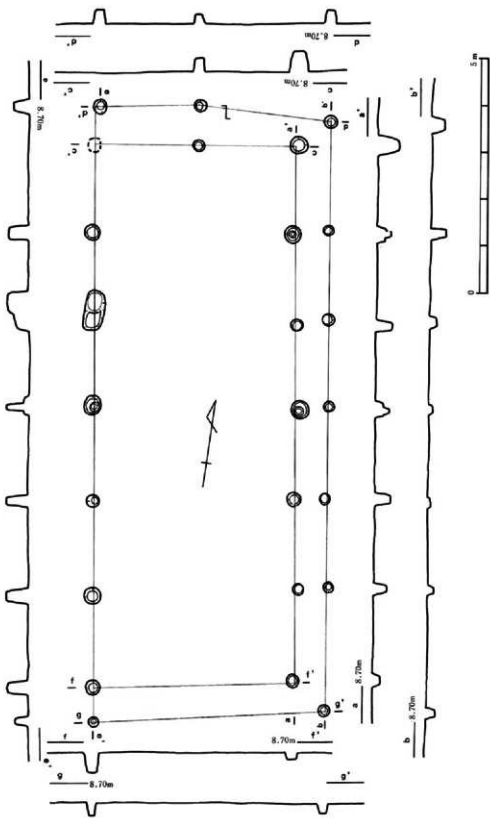
**B-6** 桁行5間(10.2m—34尺) 梁行2間(4.5m—15尺)の東西棟(主軸はN84°W)の建物である。柱間寸法は桁行で西から7尺+6尺+6尺+7尺+8尺であり、梁行は北から8尺+7尺である。

**B-7** 桁行3間(6.0m—20尺) 梁行2間(4.2m—14尺)の東西棟(主軸はN86°W)の建物である。柱間寸法は、桁行で7尺+6尺+7尺、梁行では東側中柱を欠くが、北から5尺+9尺である。

**B-8** 桁行4間(5.5m—18尺) 梁行1間(3.0m—10尺)の東西棟(主軸はN86°W)の建物である。柱間寸法は、桁行で西から5尺+5尺+4尺+4尺であり、梁行は中柱を欠く。西方へ延びる可能性をもつ。

**B-9** (第15図) 身舎規模は、桁行6間(11.4m—38尺) 梁行2間(4.2m—14尺)の南北棟(主軸はN10°W)の建物であり、北・東・南に庇をもつ。身舎柱間寸法は、桁行ではほぼ等間で、平均1.84m(6尺強)である。梁行は7尺+7尺で、南側では中柱を欠く。庇は平均0.7~0.8m(2尺)の幅をもち、柱間寸法は北側で西から7尺+9尺、東側で北から8尺+6尺+6尺+6尺+6尺+9尺、南側で16尺である。

**B-10** 身舎規模は、桁行3間(6.3m—21尺) 梁行1間(2.7m—9尺)の東西棟(主軸はN89°W)の建物であり、北側に庇をもつ。身舎柱間寸法は、桁行で西から5尺+9尺+7尺であり、梁行では中柱を欠く。庇は幅60cm(2尺)である。



第15图 独立柱建物 (B-9) 实测图

**B-11** 桁行3間(6.2m—21尺) 梁行2間(5.4m—18尺)の南北棟(主軸はN4°E)の建物である。柱間寸法は、桁行では西側が北から8尺+6尺+7尺、東側が7尺等間であり、梁行では9尺等間である。この建物の北側には梁行に平行するように柱穴が存在するが、方向にややずれをもつため、庇等の施設としては扱わなかった。

**B-12** 桁行3間(5.4m—18尺) 梁行1間(4.2m—14尺)の東西棟(主軸はN81°W)の建物である。柱間寸法は桁行では6尺等間であり、梁行は中柱を欠く。

**B-13** 桁行2間(4.9m—16尺) 梁行2間(3.6m—12尺)の東西棟(主軸はN80°W)の建物である。柱間寸法は、桁行では8尺等間、梁行では6尺等間で東側梁行の中柱を欠く。

## (2) 土 城

中世の土城は19基検出された。その多くは、上部を削平されており、しかも遺物をわずしか含まない。

**P-47**(図版 11) 調査区北端近くに位置するやや大型の土城で、長軸335cm・短軸280cmの卵形の平面形をもつ。地山面から70~80cmの深さで土城東寄りに方形に近い平坦面をなし、西寄りにさらに35cm落ちて円形の底面に至る。最も深い部分で地山面からの深さ112cmである。埋土には土師器擂鉢片を含む。

**P-50・51・53** IV地区東側の柱穴群に介在する小土城である。長軸102~138cm・短軸58~95cm・深さ10~20cmで主軸はP-50・53が南北、P-51が東西にとる。

**P-52** 長軸130cm・短軸86cmでやや小型であるが、深さは102cmを測る。平面形に対しての深さが特徴的であるが、機能は不明である。

**P-55・56・57・58** IV地区南東隅に一直線上に相接して連なる土城群である。おのおのの規模は、長軸225・125・210・153cm、短軸215・125・178・145cm、深さ46・24・60・9cmである。平面形はいずれも不整形をなし、断面形はいずれも浅い台形状である。P-56はP-55・57によって切られるが、P-58と他の土城との前後関係は不明である。P-55は完形の皿1点(第26図 44)をP-56は完形1点を含む土師器杯2点(第26図 57・58)および土師器擂鉢等を出土した。P-57は埋土に自然石を多く含み、その中に混って瓦質土器片も出土した。いずれの土城も用途不明であるが、一直線上に連なること、その軸線延長上にP-58に伴う溝が延びていることから、溝と関係する遺構であろうと考えられる。

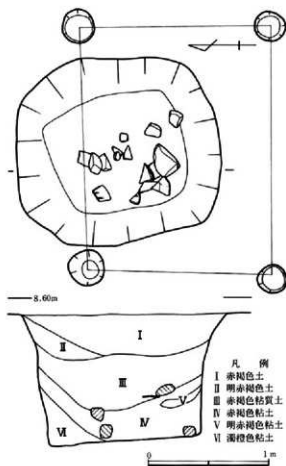
**P-59** 西に延びる浅い溝を介してD-58と連結し、南北方向の溝(D-16)に切られる浅い土城である。平面形は長軸325cm・短軸242cmの不整形であり、深さは16cmである。埋土中に瓦質土器壺(足鍋)脚を含んでいた。

**P-63** III地区北端に位置するほぼ円形の土城である。長径226cm・短径209cm・深さ94cmの規模をもち、磁石・瓦質土器片等を出土した。

**P-64** III地区北西端に位置する卵形(長軸145cm・短軸91cm)の土城であり深さは15cmであ

る。埋土から若干の自然石とともに土師器脚付皿脚部2点(第26図 54ほか)および青磁碗片等を出土した。青磁碗より13~14世紀に比定できる。

**P-65** (第16図、図版 11) Ⅲ地区西寄りに位置し、長軸173cm・短軸157cmの不整な隅丸方形の平面形をもち、深さは108cmである。埋土下層には自然石とともに土師器皿・脚付皿・鍋および瓦質土器擂鉢が含まれていた(第26図45・53、27図63・64)特に擂鉢については、割れ口が磨滅しておらず、ほぼ完形に復元できたことから、意図的な破壊・投棄を想定できよう。本遺構中央から中心を南へずらして周囲に4個の柱穴が存在する。これらは本遺構に付随する、1間(2.1m—7尺)×1間(1.5m—5尺)の東西に長い掘立柱の小建築物を構成するものと考えられ、このことは本遺構の機能を暗示するものである。積極的根拠は得られないものの、素掘り井戸とその覆い屋と把えることができる。



第16図 土坑(P-65)実測図

**P-38** Ⅲ地区中央西寄りに位置する小土坑である。長径130cm・短径103cmの長円形で、深さはわずか9cmを残す。

**P-69** Ⅲ地区中央南寄りに位置する長径65cm・短径58cm・深さ39cmの不整長円形の土坑であり、北側を柱穴に切られる。埋土中から青磁碗片(第26図61)を出土した。

**P-70** Ⅱ地区北西端の土坑である。一辺120~130cmの不整な方形の平面形をもち、深さは78cmである。P-65に似た形状である。

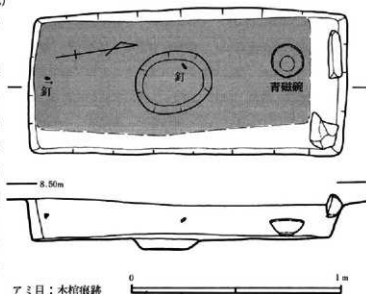
**P-71・72** Ⅱ地区北西の浅い土坑である。長軸・短軸・深さは、P-71で208cm・144cm・8cm、P-72で172cm・153cm・16cmであり、平面形は不整長円形および隅丸方形である。

**P-73** (図版 12) Ⅱ地区南西に位置する径約120cmの不整円形の土坑である。深さは154cmを測り、断面形は袋状をなす。底面中央に柱穴状のピットを有し、両側壁面には棚状のくぼみを設ける。埋土からは多くの自然石および鉄滓に混って瓦質土器火鉢・鉢(第27図66・67)を検出した。

(3) 墓 (第17図、図版 12)

確実な墓はP-74のみである。

P-74 III地区西端に存在し、主軸を南北(N9°W)にとる木棺墓である。長軸153cm、短軸69cmの長方形であり、最も残りの良い部分で20cmの深さをもつ。掘り込みの段階で木棺痕跡を認め、棺が墓域南西隅に寄せられていることが確認できた。墓域北壁沿いには、アミ目；木棺痕跡



第17図 墓(P-74)実測図

られる2個の自然石が検出された。底面中央には墓域に伴う掘り込み(37×30cm・深さ5cm)が認められるが、その意味・機能は不明である。棺内北西に完形の青磁碗(第26図62)が埋納されており、頭位を北としたことが推定される。埋土中からは鉄釘が数点検出された。

(4) 溝

中世の溝は18条検出され、方向性は国土座標に対して10°~12°東に振れている。

D-3・4 IV地区北西に位置する溝である。D-3は調査区北西隅から東に延び、D-4を切って南へ折れ曲がる。

D-5~9 D-5~8はIV地区のほぼ中央を南北に走る直線的な溝であり、調査前の水田畦畔に沿う。D-9はD-7に切れ、D-5・7・8はP-75(地下式横穴)を切る。

D-10 掘立柱建物(B-5)の西・南・東の三方を囲むコ字状の溝である。P-59を切る。

D-11~13・15 弥生時代のV字溝を切る溝であり、他の溝とは方向性を異にする。D-12からは14世紀に比定できる青磁碗(第26図59)・瓦質土器鼎(第27図65)を出土した。D-15からは近世陶器が出土した。

D-14・16・17 調査区東端に沿う南北の溝である。D-17はD-16に切られており、前者は出土遺物から16世紀末に比定される。

D-19 III地区西端に位置する東西方向の溝であり、近世陶器を含む。

D-20 II地区に位置するY字状の溝であり、東端で最も深く、西端では浅くなって消失している。

(5) 地下式横穴 (P-75 第18図)

IV地区のほぼ中央に位置し、天井部を失った複式の地下式横穴である。天井部の崩落と思われる大量の地山土塊を含むこと、床面を平坦につくこと、壁面の上位で内湾する部分が多いこと、閉塞と考えられる施設が認められることなどから地下式横穴として扱った。

遺構は、竪坑・羨道・前室・玄門・玄室の各部から成る。竪坑は現状で深さ60~80cmを残し、幅60~80cm・奥行60cmほどの平坦面へ導く。羨道はこの平坦面より一段低い(40cm前後)床面をもち、天井部を失うために明確ではないが、奥行90~100cmほどと思われる。幅は70~130cmであり、奥に行くにつれて徐々に幅を増す。前室は羨道との間にわずかな段差(10~15cm)を有し、床面は径190cm前後の不整円形ないしは隅丸方形である。前室埋土には多量の円・角礫が混入しており、その一部は羨道・玄室へも広がっていた。「P-75埋土中層」として後述する遺物は、この礫群中から出土したものである。また、玄門前面の床面から、土師器皿7・杯1が出土した。これらは一箇所からまとまって出土し、完形品を複数含むことから、本遺構の使用に関する遺物と見てよい。玄門は幅106~120cm・奥行50~60cmであり、前室とは10~20cm・玄室とは20~30cmの段差を有する。玄門部には、扁平な自然石を下段に置き、その上に自然石を積み上げた状況が見られた。一部は玄室床面に落ち込んでおり、閉塞施設と考えられる。玄室は不整な台形状の平面形をもち、奥に行くにつれて幅を増す(玄門部側110cm・奥壁側180cm・最大幅220cm)。玄室は竪坑-羨道-前室の軸方向(ほぼ南北)に対して約120°の角度をもって斜行する主軸(北西-南東)をもち、主軸上での奥行は約270cmである。奥壁は下位において左右側壁との境に稜線を有する。玄室内からは何らの遺物も発見されなかった。天井高は残存壁面から考えて、120cmを越えることは確かであるが、詳細は不明である。

掘り込みに対しては、その平面形から2基の単室構造の地下式横穴が切り合っている可能性を考慮したが、その痕跡は確認できなかった。このことは、前室埋土中の礫群の一部が玄室へも流入していたことから追認されよう。

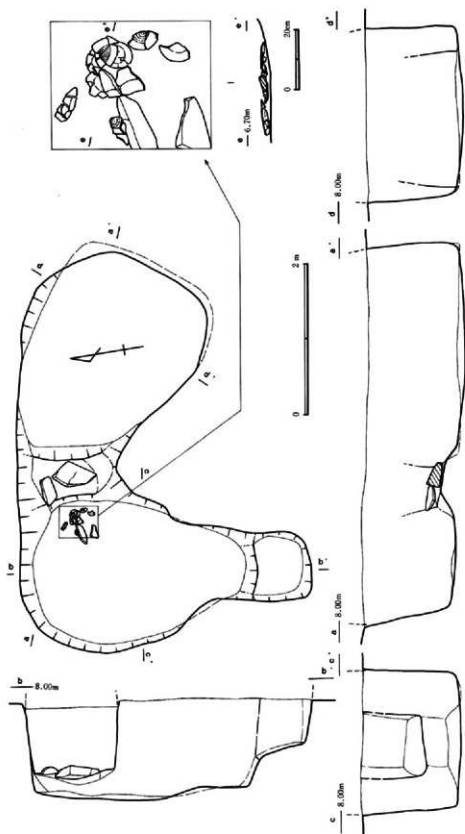
中世地下式横穴の機能については、一般に貯蔵用施設あるいは墳墓と考えられている。本例では玄門部で閉塞する点・前室玄門寄りに土器を置いている点から考えて、人骨等は検出されていないものの、墳墓である可能性が高い。その際、前室の機能が問題となろうが、これは類例に乏しいため、にわかには断じ難い。今後、類例の増加を待って検討すべき点である。

本遺構の時期については、前室床面出土の土器が指標となる。土師器杯(第26図55)については、この器形が14世紀前半の長門国府(忌宮神社地区) LW001出土の土器群に見られず、大内氏館跡出土土器(14世紀後半~16世紀半ば)の中でも古相を示す一群の特徴に近いことから、鎌倉時代後期ないしは室町時代前半の年代が考えられる。(岩崎)

※1 下関市教育委員会 『長門国府 長門国府周辺遺跡調査報告Ⅱ』 1978。

※2 山口市教育委員会 『大内氏館跡出土の遺物について』(『大内氏館跡Ⅴ』山口市埋蔵文化財調査報告第16集) 1983。





第18图 地下式横穴 (P-75) 实测图

### 3. その他の時代

#### (1) 掘立柱建物 (B-1)

調査区の北西部、貯蔵用竪穴群の東端に位置し、貯蔵用竪穴P-31と重複関係にある。P-31より新しく、2間×2間の総柱である。柱間寸法は東西方向で平均191cm、南北方向で172cmを測り、桁行長約3.8m、梁行長約3.4m、建物方位はほぼ真北。柱穴は総数9個で、平面形はほぼ円形、大きさは平均値で径46cm、深さ22cmを測る。遺物は、北東隅および北西隅の柱穴から、それぞれ土器小片(時期不明)が出土した。倉庫と思われる。

#### (2) 土 塚 (P-76)

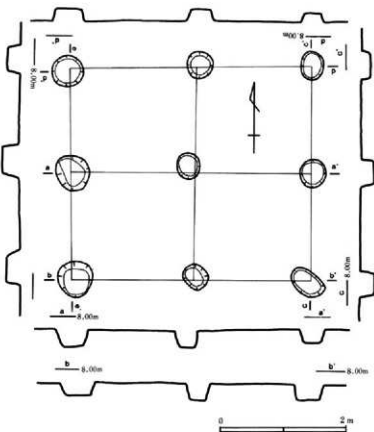
調査区の北西端に位置し、貯蔵用竪穴P-13と重複関係にある。切り合いからP-13より新しい時期の土塚である。平面形は楕円形を呈し、長径約93cm、短径約80cm、深さは約15cmと浅い。遺物は、3個体以上の土師器の甕が出土した。

B-1、P-76共に、出土遺物からの時期決定は困難であるが、郷遺跡で検出された2基の総柱建物<sup>※</sup>が古墳時代後期以降のものと推定されていること、本調査区の南東約200mに上ノ山古墳(六世紀後半)

が存在すること、遺構検出段階で六世紀後半の須恵器が出土したことなどから、ほぼ同時期の遺構である可能性が高い。

(大村)

※「綾羅木郷遺跡1」  
(1981 下関市教育委員会)



第19図 掘立柱建物 (B-1) 実測図

## V 主な遺物

### 1. 旧石器時代 (第20図 図版16)

第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ地区の竪穴や土坑から発見した旧石器は6点、その内訳は細石核3点、細石刃1点・ナイフ形石器2点である。いずれも弥生時代の貯蔵用竪穴および土坑の埋積土から出土したものである。

#### 細石核

1. P-2 黒曜石 (a) 2.7cm (b) 1.55cm (c) 2.5cm (d) 1.6cm (e) 82° 7.45g

母岩を剝離した剝片をそのまま打面とし、正面(A)で細石刃剝離を行う。I剝離工程が見られる。側面(B.C)は石核の原型製作上の剝離でその結果、半円錐形となる。

2. P-43 黒曜石 (a) 3.9cm (c) 3cm 7.5g

石核の細石刃を採りやすくするために行った調整の剝片。元の原形は木の葉形。Aに示すように側縁の一部。矢印は打面製作時の打撃方向。

#### 細石刃

3. P-2 黒曜石 (長) 2.75cm (幅) 1.1cm (厚) 0.6cm 1.3g 完形

細石核からの剝離作業によって作り出された剝片。

#### ナイフ (背つき尖頭器)

4. D-1 黒曜石 (長) 3.85cm (幅) 1.6cm (厚) 0.7cm 8.15g 完形

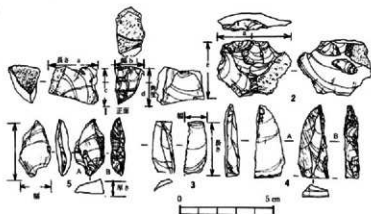
縦長剝片を素材とする。尖端部鋭利。A側縁は基部調整、B側縁は刃つぶしが行われる。(刃つぶしの打撃方向)

5. P-43 黒曜石 (長) 3.00cm (幅) 1.7cm (厚) 0.7cm 3.2g 完形

縦長剝片を素材とする。尖端部鋭利。基部調整はA側縁へ下部3分の1、背部調整はB側縁全体にわたる。(木材)

第20図 旧石器時代の  
遺物実測図

mc : 細石核の高さ  
d : 細石核剝離面の高さ



## 2. 弥生時代

### (1) 土器

各遺構から掘り出された弥生土器片は、総数15,000点以上ある。今回は整理し終わったものの中から、代表的な土器の概略を掲載するにとどめる。器種は、壺・甕・蓋・鉢に分けられる。このうち、壺には、大型無文壺・短頸無文壺を含む。

6. 壺 P-7出土。器高20.0cm、口径13.2cm、最大胴径18.5cm、底径6.6cm。胎土は精良、砂粒を含む。焼成はやや軟。色調は浅黄褐色、一部褐色。口縁部は大きく外反、外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させている。内面に貼り付け突帯があり、その一部を注口状に口縁端部まで伸ばしている。頸部は内傾し、胴部との境に段がある。胴はほぼ中央部で強く張り出し、その上半部に沈線・羽状文・樹歯文をへらにより描いている。底部は平底で肥厚する。底部横面に2条の沈線を飾る。胴部との間に段がある。調整は、内面突帯とその周辺がナデ、その他器面がへら磨きである。

7. 壺 P-30出土。胴部から底部残存。最大胴径19.5cm、底径7.0cm。胎土は精良、砂粒を含む。焼成は良好。色調は浅黄褐色。頸部と胴部の間に小さな削り出し突帯がある。胴部は強く張り出し、その上半部に沈線・羽状文をへらにより描いてある。羽状文の方向は3カ所が変わる。底部は円板を張り付けており、平底である。調整は、へら磨きである。

8. 短頸壺 P-18出土。口縁部欠失。最大胴径9.3cm、底径4.8cm。胎土は精良、砂粒を含む。焼成は良。色調は褐色。胴部は球形に張り出す。底部は平底。調整はナデ。底部は指頭で成形している。

9. 壺 P-21出土。口縁部から頸部残存。口径10.4cm。胎土は精良、砂粒を含む。焼成は不良。色調は灰褐色。口縁部はあまり外反せず、内面に1条のへら描き沈線がある。口縁部直下に、先端に刻目を施した1条の突帯が貼り付けてある。内面の沈線から下はへら磨き。その他はナデ。

10. 壺 P-21出土。口縁部のみ残存。胎土は精良。焼成は不良。外反する口縁と思われる。内面に1条の貼り付け突帯。外面の貼り付け突帯の先端には、板目状工具による刻目が施されている。その下には1条のへら描き沈線。さらにその下に、へらで削り出された1条の低い突帯がある。

11. 壺 P-21出土。頸部から肩部の破片。胎土は精良、砂粒を含む。焼成は良。頸部は内傾。頸部と胴部の境に刻目のある1条の突帯がある。胴部に3条の沈線と鱗状文が残る。内外面、へら磨きしている。

12. 壺 P-21出土。頸部から胴部残存。胎土は精良、砂粒を含む。焼成は良。頸部と胴部の境に1条の貼り付け突帯がある。胴上半部には、沈線、羽状文が、へらによって描かれている。内外面へら磨きしている。

13. 大型無文壺 P-46出土。ほぼ球形。器高62.7cm、口径42.4cm、最大胴径58.2cm、底径15.8cm。胎土は粗。焼成は軟。色調は浅黄色。口縁部は外反し肥厚する。頸部は内傾。頸部と胴部の間に段がある。胴部は球形に張り出す。底部は平底、器表の磨滅が著しく、調整は不明である。

14. 壺 P-35出土。口縁部から胴上部まで残存。口径26.6cm。胎土は精良、砂粒を含む。焼成は良好。浅黄橙色の胎土に、明赤褐色の化粧土をかける。口縁部は大きく外反、内面に1条の貼り付け突帯がある。頸部上位に板目状工具による4条の沈線がある。頸部と胴部の境を削り出して段を作っている。胴部上半分に、沈線・羽状文がヘラにより描かれる。羽状文の文様帯は、縦の沈線により3つの区画に区切られている。内面の突帯とその周辺はナデ、他の所はヘラ磨きしている。
15. 壺 P-35出土。口縁部から胴上部まで残存。口径26.6cm。胎土は粗、砂粒を多く含む。焼成は良好。浅黄橙色の胎土に明赤褐色の化粧土を施す。口縁部は大きく外反、端部内面に粘土を貼り付け肥厚させている。内面に1条の貼り付け突帯がある。頸部上位に板目状工具による5条の沈線がめぐる。頸部と胴部の境に沈線（痕跡的な段）がある。胴部に3条のヘラ描き沈線と、鋸歯文風の文様がある。内面貼り付け突帯とその周辺、口唇部はナデ。他の所はヘラ磨き。頸部内面にハケ目が残る。
16. 壺 P-35出土。胴最広部から底部まで残存。最大胴径55.7cm。底径12.4cm。胎土は粗、砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は浅黄橙色。胴部は強く張り出す。最広部に貼り付け突帯があり、突帯に板目状工具により4条の沈線をめぐらせている。底部は肥厚し平底。底部の横外面に6条の沈線がめぐる。器面の磨減がひどく調整法は不明。
17. 壺 P-35出土。頸部から胴部まで残存。最高胴径32.5cm。胎土は粗、砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は浅黄橙色。内面に1条の貼り付け突帯。頸部に板目状工具による4条の沈線。頸部と胴部の境に1条の低い突帯を削り出す。胴上半部にタマキ貝を使って、沈線・羽状文・鋸歯文を描く。胴の最広部に板目状工具により4条の沈線をめぐらす。内外面ともヘラ磨き調整。
18. 短頸壺 P-43出土。口縁部先端を欠失する。最大胴部13.0cm。底径5.0cm。胎土は粗、砂粒を多く含む。焼成は良好。色調はにぶい橙色。口縁部は短く外反。胴部は丸く張り出す。底部はやや上げ底。調整は全面ナデ。
19. 壺蓋 P-43出土。ほぼ完形。径6.2cm。最大高2.9cm。胎土は精良、砂粒を含む。焼成は不良。色調は浅黄橙色。器形は笠状。外面は、中央部が高まり、そこから外反する双頭の短いつまみに分れる。周縁に2孔ずつで1対となった計4個の小孔がある。内面は指頭により成形され、後に外面とともにナデ。
20. 甕 P-9出土。ほぼ完形。器高22.7cm。口径23.8cm。底径7.1cm。胎土は粗、砂粒多し。焼成は良好。色調は橙色。口縁部は短く緩く外反する。口縁部直下に1条の沈線がめぐる。胴部は少し張り出す。底部は平底。外面はハケ調整、内面の調整は磨耗のため不明。
21. 甕 P-35出土。口縁部から胴部まで残存。口径28.4cm。胎土は粗、砂粒多し。色調は淡赤橙色。口縁部は短く外反。口唇部に刻目がある。口縁部直下に1条の沈線がめぐる。胴部は張り出す。外面はハケ調整。口縁部外面はその後横ナデ。内面はヘラ磨き。

22. 甕 P-35出土。器高20.7cm。口径19.6cm。最大胴径17.9cm。底径 5.7cm、胎土は粗、砂粒を多く含む。焼成は良。色調は内面、胎土がにぶい橙色、外面がにぶい赤褐色。口縁部は短く外反する。口唇下端に刻目がある。口縁直下に4条の沈線がめぐる。胴部は張り出す。胴部と底部の間はくびれる。底部は肥厚し平底。器面の磨耗が著しいが、外面にハケ目が残る。
23. 甕 P-10出土。ほぼ完形、器高28.6cm。口径27.0cm。底径 8.4cm。胎土は粗、砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は橙色。口縁部は短く外反する。口縁部直下に2条の沈線がめぐる。胴部はあまり張り出さない。底部は平底。口縁部は横ナデ。その他外面はハケ調整の後ナデ。
24. 甕 P-30出土。ほぼ完形。器高29.3cm。口径27.2cm。最大胴径26.4cm。底径 9.7cm。口縁部は短く外反。口唇下端に刻目を施す。口縁部直下に3条のヘラ描き沈線がめぐる。胴部は張り出す。底部は平底。口縁部は横ナデ。他の所はハケ調整。
25. 甕 P-21出土。口縁部から胴上部残存。胎土は精良、砂粒を含む。焼成は不良。色調は橙色。口縁部は短く外反、その下に1条のくっきりした沈線と重弧文を施す。口縁部ナデ。その他はヘラ磨きしている。

26. 脚付鉢 P-35出土。胎土は精良、砂粒を含む。焼成は良好。色調はにぶい橙色。胴部はやや内湾しながら立ち上がり、そのまま口縁部となる。底部は上げ底、全面、ハケ調整の後ナデ。脚部に指頭でスリ上げた痕がある。内面に輪積みの痕が残る。
27. 鉢 D-2出土。半残存。器高13.3cm。口径20.0cm。底径 8.5cm。胎土は粗、砂粒を多く含む。焼成は良。色調は浅黄褐色。底部は平底。外方に立ち上がった胴部は、口縁部で少し外反する。器面は磨滅して調整は不明。底部一部にハケ目が残る。

当遺跡と隣接する綾羅木郷遺跡では、弥生土器をⅠ式からⅣ式までに編年している。「綾羅木郷遺跡Ⅰ」下関市教育委員会1981)先に挙げた壺を、この編年に当てはめるならば、次のようになる。7の壺・13の大型無文壺はⅡ式。6と14の壺はⅢ式A。15と17の壺はⅢ式B。16の壺は、胴最広部に沈線のはいった貼り付け突帯を持ち、Ⅲ式Bの特徴を有する。しかし、底部に6条の沈線があり、同時にⅢ式Aの特徴も有している。図に掲げられなかったものも含めると、出土した土器の時期の幅はⅡ式からⅣ式までである。その中でも最も量の多かったものは、Ⅲ式AからⅢ式Bであった。

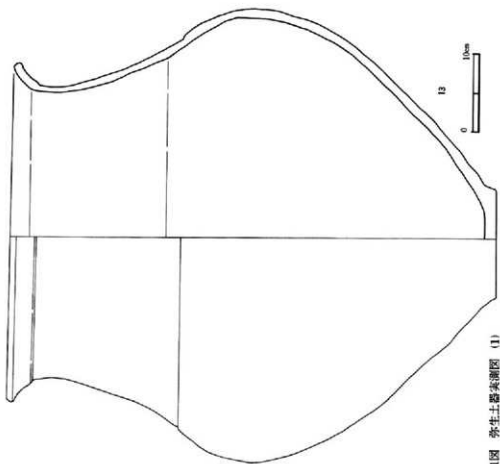
出土した器種は、壺・甕・蓋・鉢の4種である。このうち蓋・鉢は、他の器種に比べ、個体数がきわめて少ない。また、高杯・朝鮮系無文土器は、この度の発掘で出土していない。壺の中で、無頸壺・長頸壺なども含まれていない。

14・15・16・17の壺、21・22の甕、26の脚付鉢は、P-35の下層から床面の一括遺物である。P-35の遺物は、Ⅲ式AからⅢ式Bの間の壺・甕を中心に、少数のその他の器種と石器である。P-35以外の貯蔵用整穴をはじめとする土坑、溝の遺物の器種も、Ⅱ式からⅣ式の間でやや時期をずらしながらも、ほぼ同じ組成をなす。

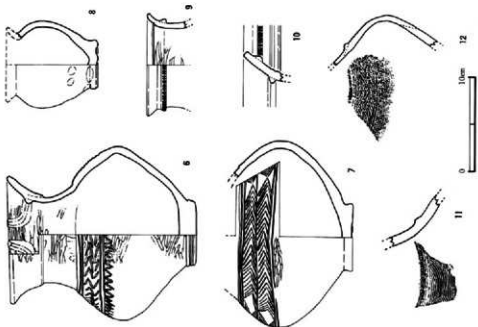
9・10・11・12の壺、25の甕は、P-25の中層から出土した遺物である。これらの遺物には、他の遺構の遺物にない特徴が見られる。すなわち、壺の口縁部外面に貼り付け突帯を持つこと、文様帯直上が突帯で区切られることである。また、他の大部分の甕がハケまたはナデで調整されるのに対して、丁寧にヘラ磨きされ、その上沈線と重弧文が施されている12の甕は注目すべきものである。

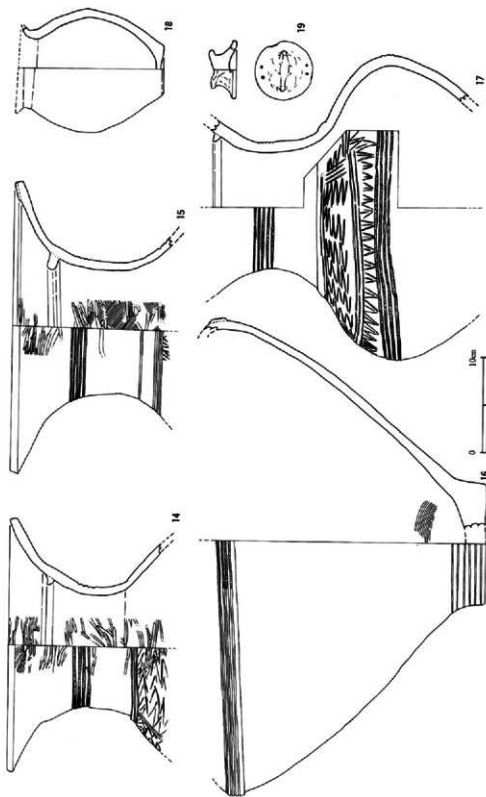
13の大型無文壺は、郷遺跡の出土土器に比べても、相当大型の部類のものと言えよう。

(中城)



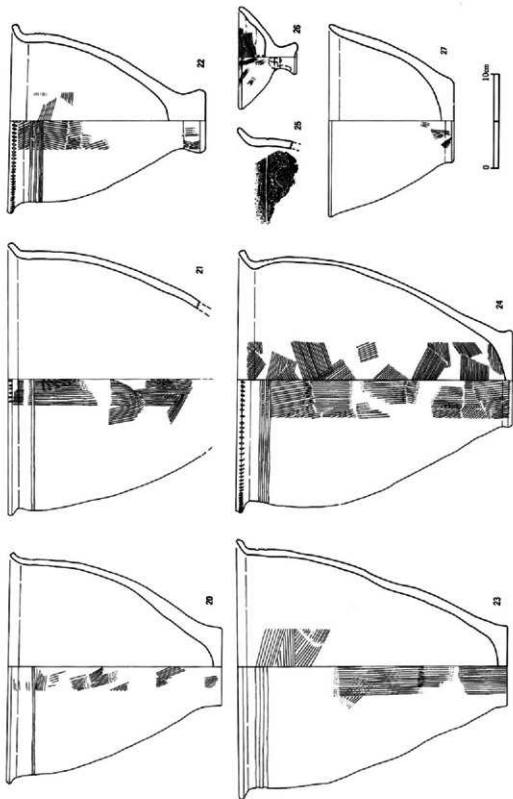
第21图 弥生土器水甕图 (1)





第22图 莽生土器素描图(2)





第23图 弥生土器类测图 (3)

## (2) 石 器

上ノ山地区で発見された弥生時代の石器には、柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・太型蛤刃石斧・磨石・石鏃・石剣・石鎌・石砲丁・石錘などがある。大半は貯蔵用竅穴や土坑などの遺構中から発見されたものである。

### 柱状片刃石斧 (24図)

28は、P-28出土品で、凝灰岩質石材を使用した、柱状片刃石斧刃部片である。現存長6.8cm、現存部幅1.35cm、厚さ4.3cmを測る。刃縁はすどく研ぎ出されており、全体に丁寧に研磨する精巧品である。現存重量54gとなる。29は、P-21から出土した凝灰岩質岩石使用の刃部片である。刃部の一侧は欠失している。現存長4.1cm、現存幅3.05cm、最大厚2.85cmを測る。28と同様な精巧品で、現存重量は52gである。31は、P-14出土の抉入柱状片刃石斧で、基部に近い一部が残存している。石材は粘板岩あるいは粘板岩質凝灰岩を使用している。現存長9.6cm、幅4cm(推定)、厚さ4.7cmを測り、断面は縦長の長方形となる。裏面の一部に敲打痕が残り、基部から4.5cmのところ、幅1.6cmの抉り部を丁寧に削りこんでいる。重量は202gを量る。

### 扁平片刃石斧 (24図)

30は、I地区第3トレンチ内から発見されたもので、遺構に伴うものではない。緑色片岩使用の完形品である。全長11.1cm、最大幅2.75cm、最大厚1.0cmを測る。縦形の短冊形をなし、全体に薄手に仕上げられており、明瞭な片刃となっている。重量は69gを量る。

### 太型蛤刃石斧 (24図)

32は、P-35出土の安山岩製太型蛤刃石斧片である。刃部寄りきを欠失している。全面風化が著しいが、一部に敲打痕と研磨面が認められる。現存長12.65cm、幅6.8cm、厚さ4.3cmを測る。現存重量は540gである。

### 磨石 (第24図)

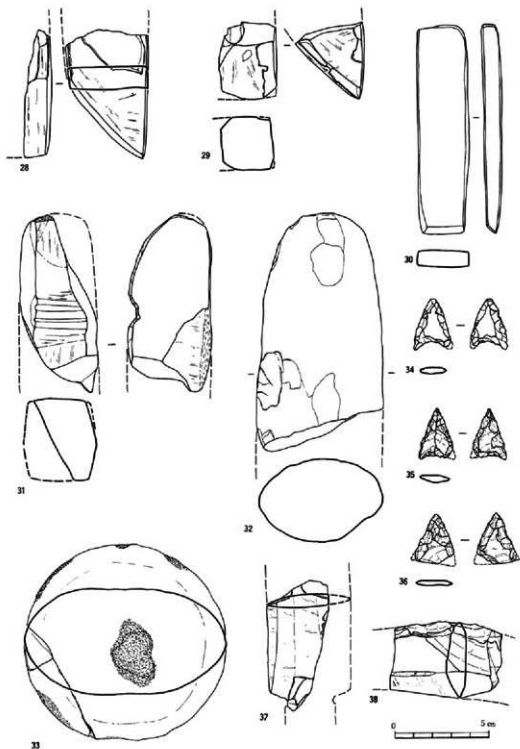
33は、P-5から出土したほぼ完形の磨石である。砂岩の自然円礫を利用したものである。直径17.5cm、厚さ5.85cm、重量939.6gを量る。全面に磨き痕があり、上・下面の中央部は敲打に使用されて凹状を呈する。

### 石鏃 (24図)

図示した3点はいずれもP-43から出土した。多量の剥片と未製品とともに発見されている。ともに珪岩を使用したもので、いずれも基部は浅い凹基をなしている。大きさは次のとおりである。34は全長2.7cm、基部幅は2cm、厚さ0.4cm、重量1.8g。35は、全長2.65cm、基部幅1.8cm(推定)、厚さ0.4cm、重量1.5g。36は、全長2.65cm、基部幅2cm(推定)、厚さ0.3cm、重量1.6g。

### 石剣 (24図 37)

P-18からの出土品で、暗灰色の粘板岩製である。石剣の一部とみられ、一側の闊部がみと



第24图 石器类测图

められる。表裏とも研磨は丁寧で、特に刃部をすどく研ぎ出している。鏃等は明瞭でない。現存長7cm、現存幅3.4cm、厚さ7.5mm、現存重量24.6gを量る。

#### 石鏃 (24・25図)

38は、P-44出土の粘板岩製磨製石鏃で、基部に近い部分の破片である。現存長6cm、幅3.4cm、厚さ7.5cmを測る。上下面とも敲打のあと研磨を行い、刃部は特にすどく研ぎ出している。背部は細かな打割調整のまま残す。現存重量40gを量る。39は、石鏃の未製品と思われる。P-33からの出土で、砂質凝灰岩を使用している。現存長8.3cm、幅4.8cm、厚さ1.6cmを測る。粗割し細打割調整の段階で折損したものである。現存重量は73gを量る。

#### 石庵丁 (25図)

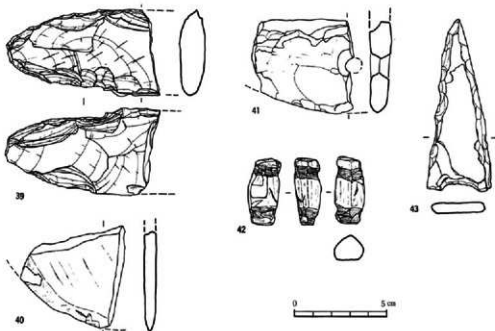
40は、P-43出土の粘板岩製石庵丁片で、刃部のうち約半が残存している。現存長5.6cm、現存幅5.3cm、厚さ0.6cmを測る。刃部は鋭利な両刃に研ぎ出し、外湾刃となっている。現存重量は20gである。41は、D-1出土の凝灰岩質砂岩を用いた石庵丁片である。全体の約半が残存。現存長5.6cm、現存幅5.1cm、厚さ1cmを測る。器表は大半剥ぎ落ちているが、研磨は丁寧に行っている。刃部は外湾刃の形態をとるとみられるが、まったく研ぎ出されておらず、製作過程で折損したものと考える。孔は両面穿孔である。現存重量51gを量る。

#### 石鏃 (25図)

42は、P-10出土の粘板岩製石鏃で、完形である。全長3.7cm、幅1.6cm、厚さ1.4cmを測る。上下端部に紐かけ状の溝があり、その全面に擦痕が認められる。断面は三角形を呈し、器表は粗い研磨が施されている。重量は12.1g。

#### その他 (25図)

43は、P-44出土で、流紋岩質岩石を使用している。形態から鏃状石器と呼んでおこう。全長9.3cm、基部幅3.5cm、厚さ0.6cmを測る。重量は19.4gである。 (木村・渡辺)



第25図 石器・石製品実測図

### 3. 中世

今回出土した中世の遺物には、土器・陶磁器・石製品・鉄製品・鉄滓などがあるが、ここでは遺構に伴う遺物、とくに土器・陶磁器を中心に紹介する。なお、45・53・63・64はP-65から、46～52・55はP-75床面から、55・60は同遺構埋土中層から、57・58はP-56から、59・65はD-12から、56・66・67はP-73からの一括資料である。

44～52は土師器皿である。44はP-55から出土した小型品であり、口径に比してやや器高が高い。45は器高が低く口径の広い皿である。46～52は地下式横穴前室床面から出土の規格性の認められる一群である。やや肉厚で丸味のある器形・内底面中央のくぼみ等の共通点をもつ。計測値は口径8.0～8.6(平均8.2)cm・器高1.7～2.3(平均1.9)cm・底径3.3～5.1(平均4.1)cmである。

53・54は脚付皿(杯)の脚部である。53はP-65から出土し、底径6.5cm・残存高3.3cmである。54は脚部の高い例であり、P-64から同種の脚1点・無文の青磁碗片・痕跡的に高台を残した土師器椀小片とともに出土した。底径6.8cm・残存高6.9cmであり、53は赤味が強いのに対し、白味を帯びる。

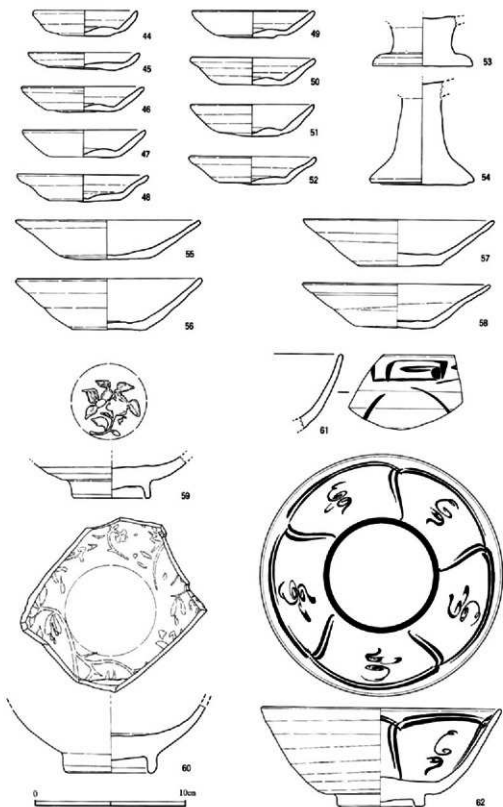
55～58は土師器杯である。ほぼ同様の形態・色調で、口径12.1～12.5cm・器高2.6～3.4cm・底径5.0～5.6cmである。57・58はP-56からの出土である。

以上の44～58はいずれも右回転のロクロで製作されており、底部の切り離しには回転糸切り技法が用いられる。

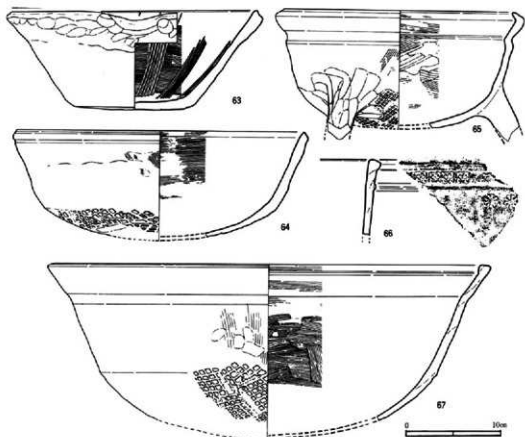
59～62は青磁碗である。59は壺付および高台内無軸の底部片であり、内底面にスタンプによって花文をあらわす。60は体部内面に唐草文ないしは花文と思われる文様を低く陽出する。61は口縁片であり、灰緑色の釉を厚く施す。外面には片切彫で雷文をあらわし、その下位にも何らかの文様の断片を残す。62はP-74(木棺墓)から出土の完形品である。釉は青味の強い青灰色を呈し、壺付および高台内は無軸である。部分的に貫入が見られる。外面は無文であるが内面は2本線で5区に画し、草花文を配する。内底面と体部の境に圏線1条をめぐらす。内底面は使用によるものか、荒れて光沢を失っている。口径15.8cm・器高6.6cm・高台径5.9cmである。

63は瓦質土器播鉢である。破片となって出土したが、ほぼ完形に復元できた。口縁端にわずかに凹部をもち、片口を設ける。内面は横方向のハケ、外面は粗いナデによって調整し、口縁部外面付近には多くの指ナデ痕を残す。内底面は使用によって磨滅しており、卸目は6条を単位とする。同種の特徴をもつ土師器播鉢がP-47・56からも出土している。

64・65・67は鍋である。64は土師器で、明瞭な稜や段のない短い口縁を特徴とする。内・外面をハケで調整したのち、外面のみを粗くナデる。外底部はやや粗い格子叩きの痕を残す。脚は付かない。65は瓦質土器の、いわゆる罎(足鍋)である。内・外面をハケによって調整し、外面は粗くナデる。外底面に格子叩きを施したのち、脚を貼り付ける。脚には指頭痕および掌痕が顕著である。内底面には炭化物が付着する。67は瓦質土器であり、破片より図上復元した。



第26図 中世の遺物実測図 (1)



第27図 中世の遺物実測図(2)

口径は推定で45cm内外であり、器高も18cmを越えると考えられる。調整手法は64・65と同様である。その大きさ・重量から、脚は付かないものと考えられる。内底面に炭化物の付着を認める。

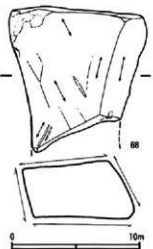
68は砸石である。珪質の砂岩であり、折損している。4面を使用し、端部に自然面を残す。石製品としては、このほかに滑石製石鍋片も出土したが、いずれも攪乱土から小片となつての出土であった。

以上のほか、若干の鉄製品も出土したが、形状不明の小片であつて図化できなかった。

Ⅱ地区からは多量の鉄滓が出土した。鍛冶滓と考えられ、炉壁の一部と見られるものを含むことから、付近に鍛冶工房の存在を想定できよう。

その他の遺物として溝(D-12・17)より獣歯を検出した。これらは牛の歯と見られ、中世における家畜保有の事実を示す資料と考えてよいであろう。

(岩崎)



第28図 砸石実測図

## VI まとめ

### 1. 弥生時代

上ノ山地区で検出された弥生時代の遺構としては、貯蔵用竪穴・土坑・溝・柱穴などがあり、住居跡は発見されていない。これらは、弥生時代前期末を中心とする時期の集落を構成する遺構群である。

**立地：**遺跡は、梶栗川流域の狭い低地を見下ろす緩傾斜面に位置している。綾羅木郷遺跡に続く洪積台地の北斜面にあたる。標高は約8m。調査地区の西側は、現在の道路敷を中心とした位置に狭小な谷が入り込み、北側から東側は比高差1～2mばかりの崖となっている。集落はこの台地縁辺に営まれたのである。梶栗川を挟んで対岸には集落遺跡梶栗遺跡・引田遺跡を望むことができる。遺跡の北面梶栗川沿いの低地は標高5m前後であり、弥生時代前後にあっては、湿地状を呈し水田として利用されたと思われる。

**集落：**第Ⅳ地区の東端で断面V字形の大溝が検出されている。弥生時代の遺構群は、すべてこの大溝の西側に展開しており、地形から判断して、大溝は遺構群の東から南を区画する環濠であった可能性が高い。すなわち、この集落は独立した単位集落であったことが推定できるのである。

調査地区の西約500mの位置に綾羅木郷遺跡がある。911基の貯蔵用竪穴を主とする遺構群が台地全面にわたり検出された大規模な遺跡であるが、この中に綾羅木Ⅰ式期およびⅡ～Ⅲ式期の数条の大溝が発見されている。この大溝は一時期に一条のみが機能しており、遺構群を囲郭するように配されている。すなわち、郷遺跡では少くとも一単位の集落が存在したのである。上ノ山の集落は、少くともある時期には、郷の集落と共存しているので、このことから独立した単位集落であったことはまちがいない。

それでは、上ノ山の集落と郷の集落はどのような関係のもとに共存したのであろうか。今のところこの問題を解明し得る手掛りはない。西日本の弥生時代集落は、5軒前後の住居を営む単位集団の複数から構成される場合の多いことが、最近の調査研究によってしだいに明らかにされている。この洪積台地上の集落を構成するひとつの単位集団が、上ノ山の集落を営んだことは十分考えられるところである。一方、上ノ山の集落が綾羅木Ⅲ式期を中心に営まれたことは、この時期が郷の集落の最盛期であることからして、ふたつの集落が母村（郷）一枝村（上ノ山）の関係にあったことを暗示しているようにも思える。いずれにしてもこの問題は今後の追求すべき大きな課題であろう。

上ノ山の集落を構成する遺構群のうち貯蔵用竪穴は、大部分集落の北西部に集中している。その密集度は郷遺跡に優るとも劣らないほどである。このことは、集落内で貯蔵施設区と住居区が明瞭に分けられていたことを表している。また、竪穴住居跡は検出されていない。しかし、集落の北東部から南部に展開していたことは、遺構配置の上からも、容易に推定できる。おそ



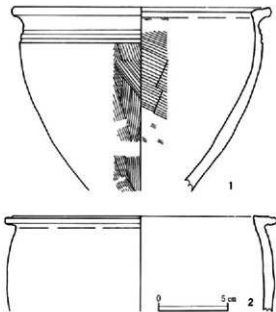
らく後世の削平により、点する柱穴だけを残して、完全に消滅したのであろう。このことは、Ⅳ地区中央部で発見された中世の地下式横穴墓が、その上半部を完全に削平されていることから明らかである。Ⅲ地区に点する3基の大形土壇は、出土遺物から、石器製作に関連する遺構であったとみられる。おそらく壑穴住居に近接して営まれた工房的な施設であったのだろう。単なる廃棄壇だとすれば、その形態・規模が不自然である。

こうして見ると、上ノ山の弥生集落の景観がおぼろげながら浮かび上がってくる。集落は、大溝で二方を隔された台地の先端部に営まれたもので、その北面の低地には水田が広がっていた。住居区と貯蔵施設区は明瞭に区別され、住居の傍らには工房的な施設も造られていたのである。集落の北と西には別の集落が存在し、それぞれのムラの人々は盛んに往来しあい、また共同作業を行ったこともあったであろう。

**時期：**集落の存続期間を考えたい。発見された弥生土器のうち最も古い様相を呈するものは、遺物番号13の大形壺（第21図）である。この壺は、全体のプロポーシオン特に口縁部および肩部に明瞭な段を有する点で綾羅木Ⅰ式かⅡ式のいずれかに相当すると思われる。同形状の壺のうち口縁部の刻目や口縁内面の沈線など新しい要素を持つものが、ⅢA式と共伴すること、他にⅠ式土器が検出されていないことなどから推すと、この壺はⅡ式に位置付けることがより妥当のように思える。貯蔵用壑穴群では、口縁内面の沈線や外面に段を有するⅡ式相当の小形・中形壺が、比較的古い時期の土器である。しかし、これらの中には遺物番号6の小形壺（第21図）のように、プロポーシオン的にはⅡ式の特徴をもつものの、口縁内面の突帯や底部の沈線などⅢA式の要素を取り入れたものが多い。以上のことから、この集落の形成は綾羅木Ⅱ式期のある時点から行われたと考えられる。

集落の終えんの時期は上図の壺が示している。1はP-35また2はP-34においてそれぞれ綾羅木ⅢB式壺と共伴している。ともに口縁が強く外折し、特に2は逆し字状を呈している。この種の壺は、北部九州の城ノ越式土器に類似し、中期初頭に位置付けることが可能である。したがって、集落は中期初頭をもって姿を消したと考えられる。（渡辺）

（参考文献）下関市教育委員会 1881.3『綾羅木郡遺跡発掘調査報告第1集』



第29図 変形土器

## 2. 中 世

調査区内からは弥生時代の遺構・遺物とともに、中世集落を構成する要素、すなわち掘立柱建物跡および柱穴・土坑・溝・墓などの遺構と、土器・陶磁器・石製品などの遺物が発見された。

今回発見された中世集落は、出土遺物から鎌倉時代後半～室町時代に比定され、その中心時期は14世紀にあると考えられる。この時期には、本集落南方の綾羅木川流域においては東西・南北の条里地割が完成し、農業基盤がすでに整備されていたと考えられる。また、東方約2kmに古代以来存続した秋根遺跡においては、前代に存在した大型の建物が廃絶し、平均化した小型の建物が疎らに存在する時期に当る。この時期の建物は本遺跡・秋根遺跡ともその規模に大きな差異は認められない。本遺跡における中世集落出現の時期が、秋根遺跡において官衙あるいはそれに関連すると考えられる大型の建物が廃絶した後であることは興味深い。以下、今回の調査の成果を整理してまとめて代えたい。

まず建物については、細かい時代設定はできないが、やや大型の建物が注意をひく。B-6・9などは一般農民の住居とするには大規模であるし、B-9については3面に庇を設けており、異質である。これらについては、居住者および建物の機能の差異を考慮すべきであろう。全般に大型の建物は調査区南半に存在し、北半では小規模の平均化した建物のみが見られる。建物規模とともに、建物と溝との関係も北・南では異なる。すなわち、北半では建物方向とほぼ平行して東西・南北の溝が存在し、建物方向を規制するかに見える。これに対して南半では溝が介在せず、北半の溝方向と明らかに斜行するものが存在する。この北・南の差異については、時期差あるいは南半における溝の削平を考慮せねばならず、指摘するに留める。

次に墓についてであるが、木棺墓に加えて地下式横穴が存在する。木棺墓については、輸入磁器を埋納して集落内に存在する類例が増加しており、比較的高裕な住人の存在を推定させるが、特異な例と考える必要はなさそうである。不確定ながら墓と考えられる地下式横穴については、北部九州を中心に本県西部でも類例が知られる。しかし、複式の例は他になく、集落内に存在する点も特異である。時代的には木棺墓より後出すると考えられる。

最後に調査区内の遺構群の示す方向性に注目すると、国土地産標に対して建物では1~9°、溝では約10°東偏する。これは秋根遺跡において「鎌倉・室町時代」とされる建物の示す方向性(10~20°西偏)とは異なっている。これは集落ごとの地形・自然条件の違いによるものだろうか。また、本遺跡の方向性は、綾羅木川流域に見られる条里の軸(3°西偏)と異なっており、調査区内の溝からは条里地割およびそれに基づくと考えられる尺度を認めることはできなかった。

(岩崎)

版 図



図版1 遺跡全景(1)



青山からの遠景



遺跡上空から綾羅木郷遺跡を望む

図版2 遺跡全景(2)



図版3 遺跡部分(1)

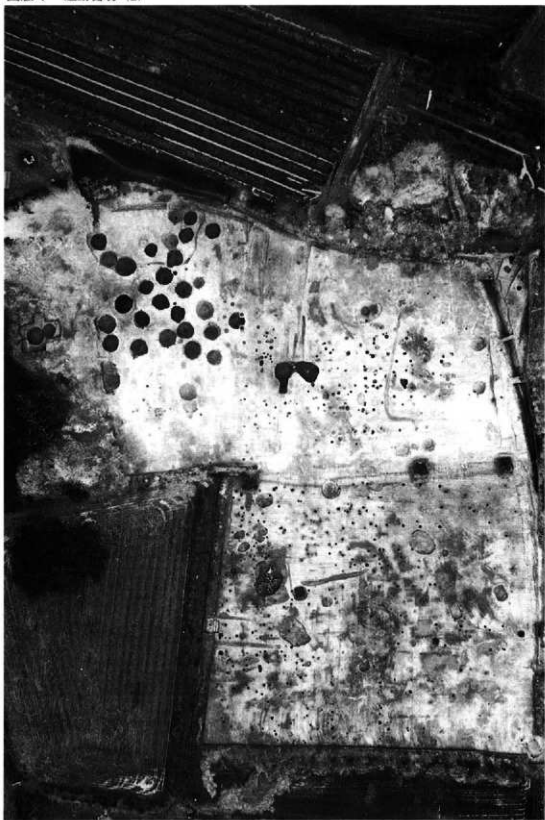


I地区



II地区

图版4 遺跡部分(2)

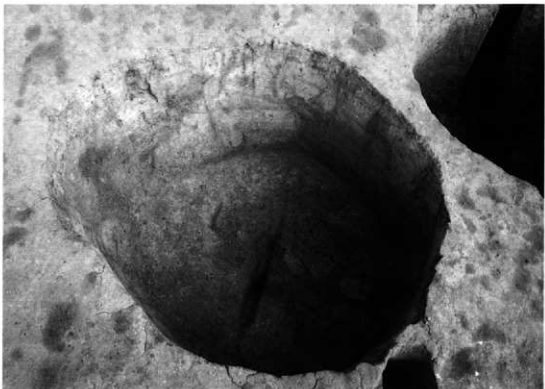


Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ地区

图版5 贮藏用竖穴 (1)



P - 3



P - 9



図版6 貯蔵用竪穴 (2)



P - 5



同上 テラス部分



P-6 (奥) P-7 (手前)



P-7 壺出土状況

图版8 貯藏用竖穴(4)



P - 12

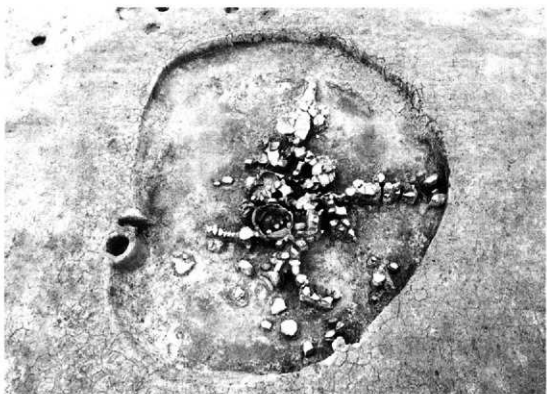


P - 21

図版9 貯蔵用竪穴 (5) ・ 弥生時代のその他の遺構 (1)



P - 35



P - 43

図版10 弥生時代のその他の遺構 (2)



P - 46



D - 1

図版11 中世の遺構 (1)



P - 47



P - 65

図版12 中世の遺構 (2)



P - 73



P - 74 墓

図版13 中世の遺構 (3)



P-75 地下式横穴 中層礫群 (南から)



同上 完掘 (西から)





P-75 玄門 (前室から)

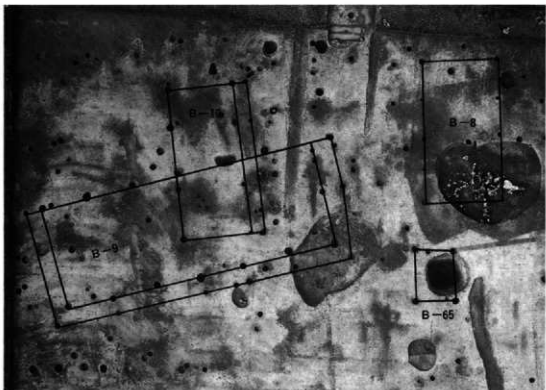


同上 遺物出土状況

図版15 中世の遺構 (5)

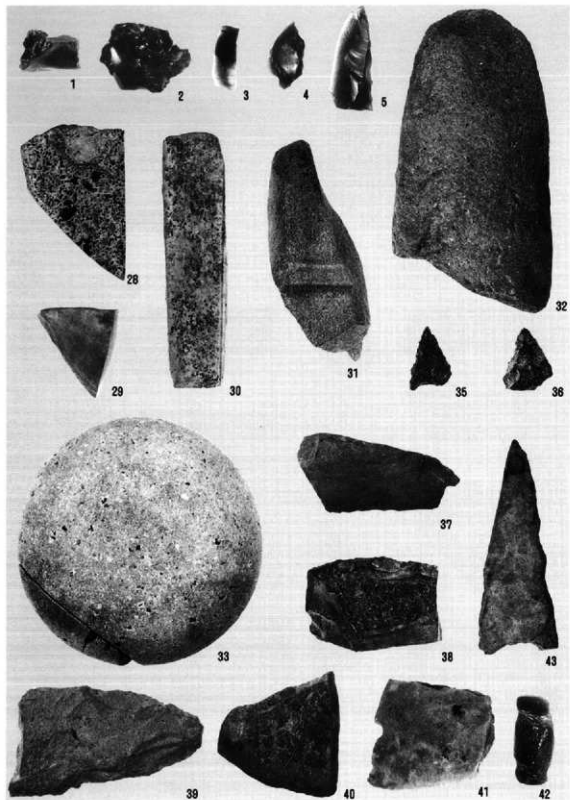


B-2、B-3、B-5

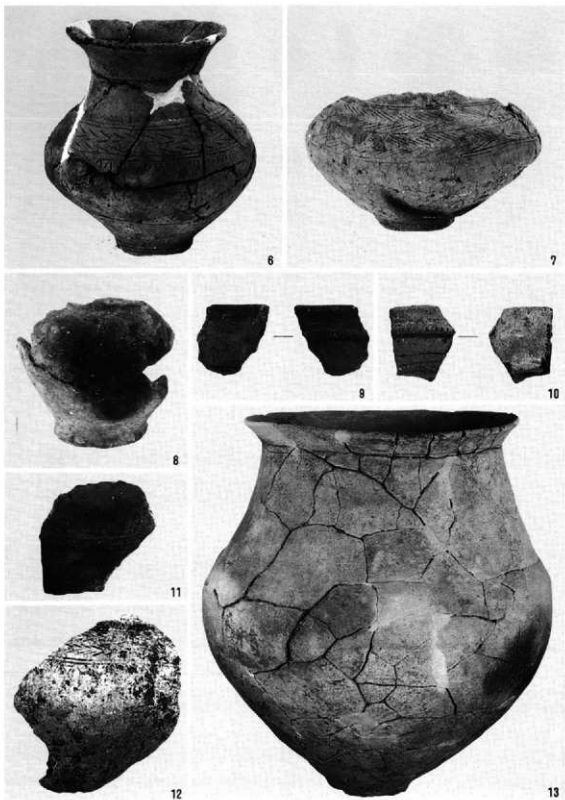


B-8、B-9、B-10、B-65

図版16 出土遺物(1)



図版17 出土遺物 (2)





14



17



15



18



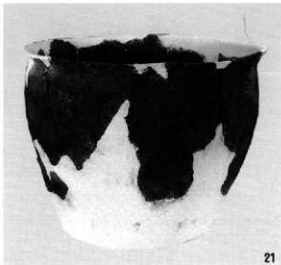
16



19



20



21



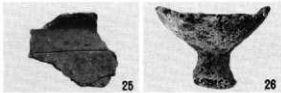
22



23



24



25

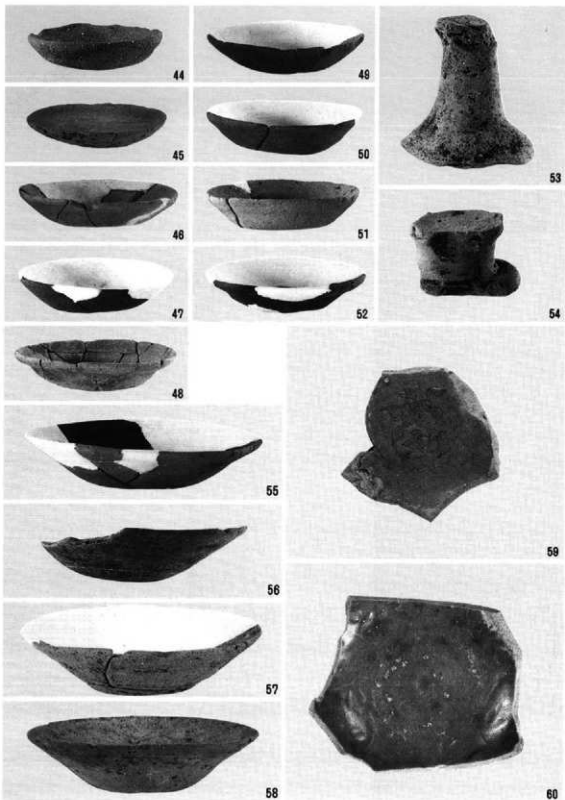


26

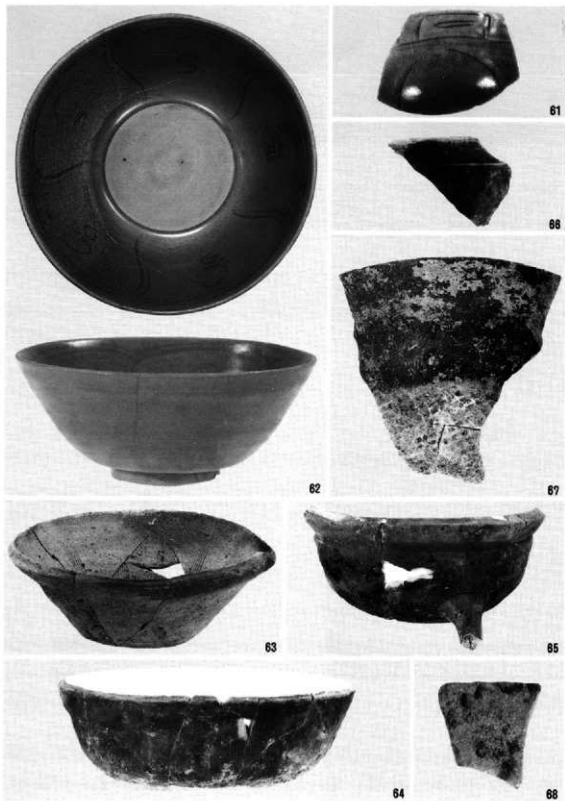


27

図版20 出土遺物 (5)



図版21 出土遺物 (6)





山口県埋蔵文化財調査報告 第91集

## 綾羅木郷台地遺跡

(上ノ山地区)

昭和61年2月

編集 財団法人 山口県教育財団  
(山口市大手町2130)

山口県教育委員会文化課  
(山口市滝町1-1)

山口県埋蔵文化財センター  
(山口市春日町3-22)

発行 財団法人 山口県教育財団  
(山口市大手町2130)

山口県教育委員会  
(山口市滝町1-1)

印刷 株式会社 丸二商行  
(山口市道祖町7-13)